福島縣案内

GUIDE BOOK

FUKUSHIMAKEN

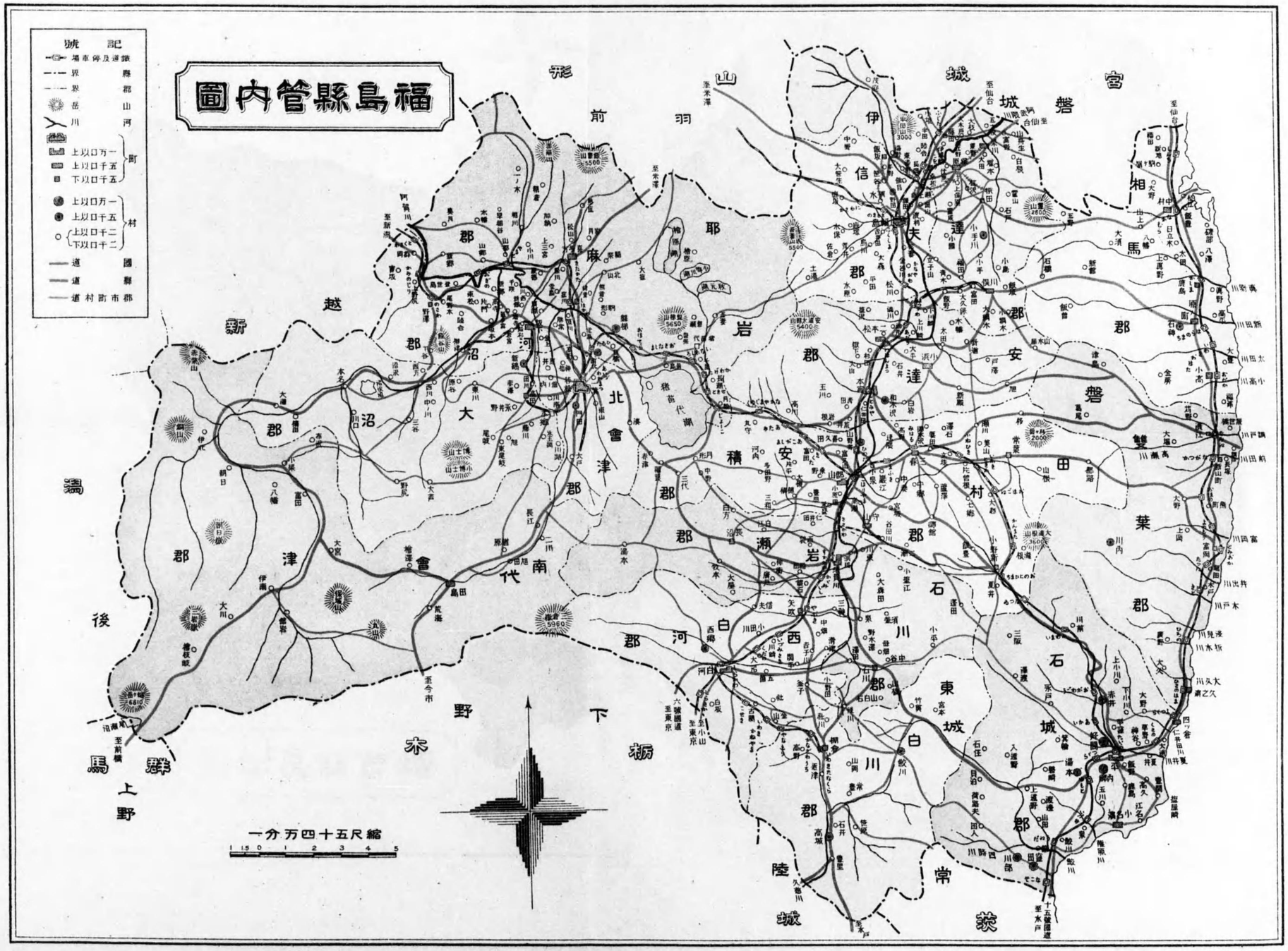
338
58
特261
655

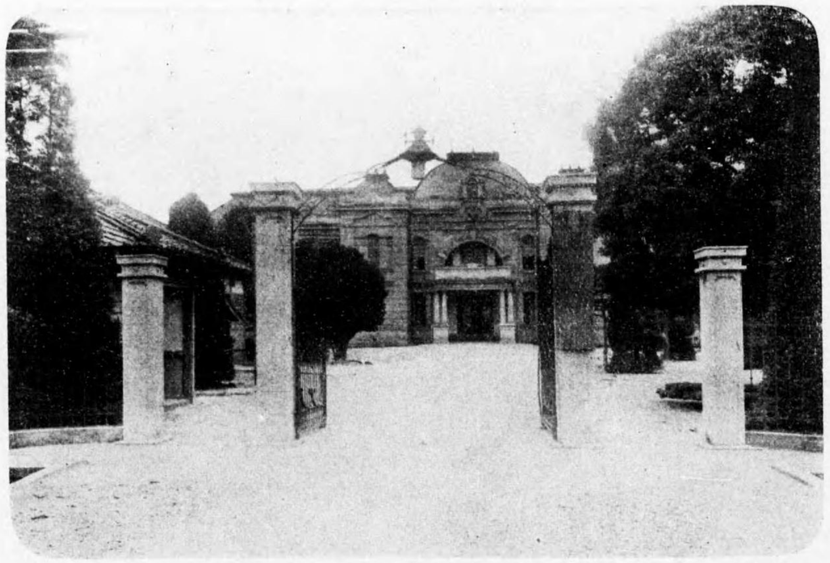
始

福島縣案內

目次

總說……一
交通……二
名所舊蹟……三
中部　福島市、信夫郡、伊達郡、安達郡、安郡積、郡山市、田村郡、岩瀨郡、石川郡、西白河郡、東白川郡
西部　若松市、北會津郡、南會津郡、河沼郡、大沼郡、耶麻郡
東郡　石城郡、雙葉郡、相馬郡
產業概要……七三
農業、蠶業、牧畜業、林業、水產業、鑛業、製絲業、川俣羽二重、會津陶磁器及相馬燒、會津漆器、釀造業、化學工業、會社事業


福島縣管内圖
號記
鐵道及停車場
縣界
郡界
山岳
河川
上以口万一
上以口千五
下以口千五
町
上以口万一
上以口千五
上以口千二
下以口千二
村
國道
縣道
郡市町村道
縮尺五十四万分一
1 1.5 0 1 2 3 4 5
至米澤
至新潟
至仙台
至前橋
至小山
至東京
至今市
至水戸
至平
至郡山
至福島
至白河
至東京
至高崎
至水戸
至前橋
至新潟
至米澤
至仙台
至郡山
至福島
至白河
至東京
至今市



福島縣廳

福島縣案内

總説

福島縣は奥羽の南端に位し、廣袤東西四十里十二丁、南北三十二里、總面積八百十九里十八丁にして管内を三市十七郡（四百三箇町村）に分ち、戸數二十四萬七千百十、人口百四十八萬二百五十を算し、南は茨城、栃木、群馬の三縣に隣接し、西は新潟、北は宮城、山形の諸縣に境し、東は洋々たる太平洋に面してゐる。地味極めて肥沃、農耕に適し、風俗溫雅、儉素能く職業に勵み、一箇年の生産額は實に二億千五百十九萬六千九百四十圓の巨額に達してゐる。内農産物は八千五百十萬七千三百七十圓、工産物は八千六百八十四萬二千百八十圓、林産物は千六百十七萬八千五十圓、水産物は四百五十四萬千九百三十圓、畜産物は五百七十一萬千七百四十圓、鑛産物は千六百八十一萬五千六百四十圓にして其産物の主なるものを擧ぐれば米、麥、蠶糸、織物、果物、陶器、漆器清酒、石炭等である。

而して本縣は地勢上中部西部及東部の三大部に分つことが出來る。中部とは俗に稱する中通、即ち阿武隈山兩脈間の福島、信夫、伊達、安達、郡山、安積田村、岩瀬、石川、西白河及東白川の二市九郡を云ひ、西部と俗に云つてゐる會津地方、即ち中央山脈以西の若松、北會津、南會津、大沼、河沼及耶麻の一市五郡、東部とは俗に濱通と稱してゐる地方、即ち阿武隈川山脈以東、太平洋沿岸の石城、雙葉及相馬の三郡を云ふのである。而して其の到る處名所舊蹟に富み、山紫水明の境多く、殊に磐梯山下猪苗代湖畔の如きは本邦中の勝地とも稱すべきものであらう。

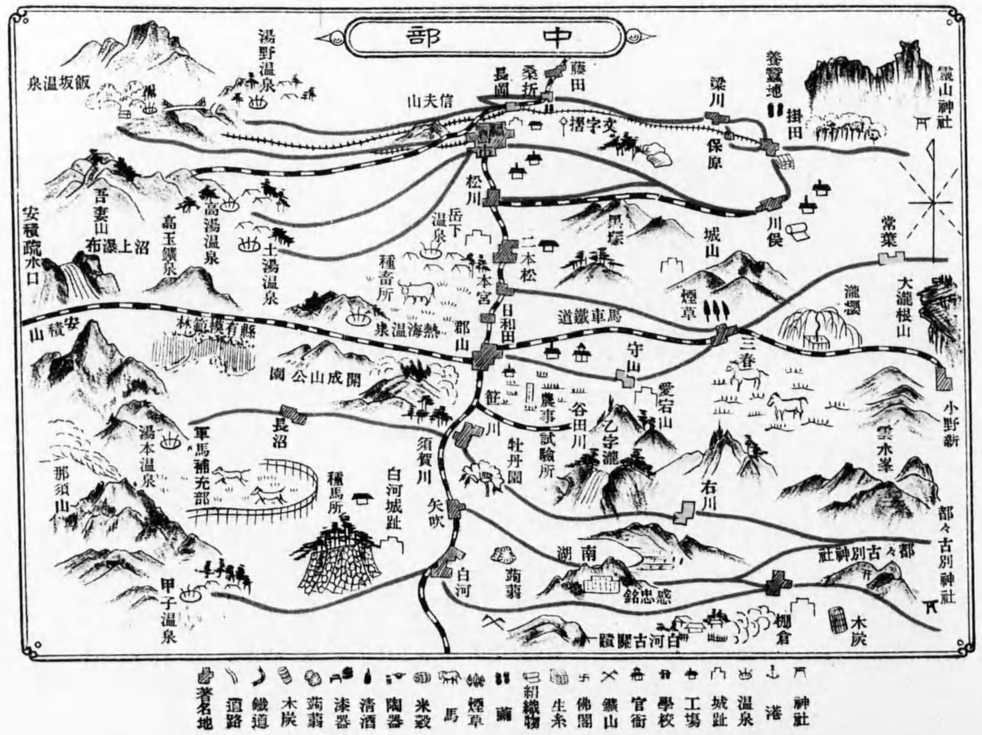
交通

鐵道東北本線は本縣の中部を貫通し「都をば霞とともにたちしかと秋風ぞ吹く白河の關」と能因法師が歌はれしは夢の昔と去りて今日は、東京より僅々半日、京阪よりは二日にて白河町に達すべく、白河町より須賀川、郡山、二本松等を經て福島市に二時間半、福島市より仙臺市にまた二時間半にて至り、福島市より青森市には急行十時間にて其驛頭の人と爲り、又福島市より山形、秋田を經て青森市に十五時間にて達すべき奥羽線の設けあり。郡山市より若松市を經て新潟縣に入る磐越西線の完備あり。又其の郡山市より三春、小野新町を經て平町に通ずる磐越東線あり。又笹川驛より水戸市に通ずる水郡線は目下工事中にして谷田川までは既に開通した。

白河町より棚倉町に至る白棚線、松川驛より川俣町に通ずる川俣線の設けあり。又福島市より飯坂、保原、梁川、掛田方面に通ずる電車の便がある。西部若松市より高田、坂下町を經て柳津に通ずる柳津線、又若松市より上三寄までの上三寄線あり。東部には常盤線の通ずるあり。即ち勿來、平、富岡、中村等海岸に沿ひ、風光明眉の間を過ぎ宮城縣に入つてゐる。

道路としては國道、縣道、市町村道實に坦々として四通八達し、各地に人車自動車の便備はざるはなく、行くとして自由ならざる處はない。其の延長は國縣道千二十六里、市町村道は九千八百八十八里である。

猪苗代湖は上戸より南岸福良方面に航する汽船の便がある。船中坐ながら附近一帶の風光を賞することが出來實に壯快である。



福島市街全景

名所舊蹟

中部

福島市

本市は福島縣の首都にして、阿武隈川及須川の左岸に沿ひ河流を隔てゝ信夫郡渡利村（東）及吉井田村（南）と相對し、西郊は土地平遠にして吾妻小富士の層巒を雲烟縹渺の間に望み、北は信夫山及松川を隔てゝ信達二郡の平野に連つてゐる。市街の廣袤東西十八町餘、南北二十九町許、面積零方里五五一、戸數七千九百、人口四萬四千九百を有し、縣廳其他の諸官衙、學校及銀行、會社、工場等多く、交通至便、人烟稠密、地方に於ける商工業の中心地である。由來此の地は近世に於ける板倉氏の城邑にして是より先治承、養和の交。杉目行信（通稱小太郎）此處に城きて杉妻城と號せしが後大佛安置したるを以て大佛城

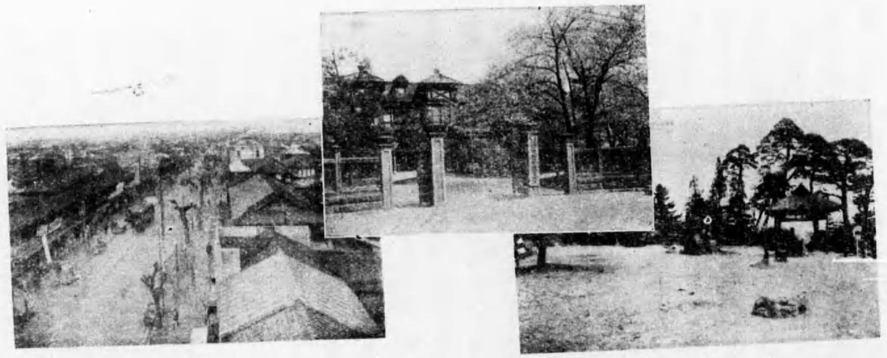
とも呼び、尋で天正十九年蒲生氏の所領に歸するに及び屬將木村重次をして此の地を管せしめ、更に福島城と改稱したるものである。爾來城主再三更迭し以て最後の板倉氏に及んだのである。然けれども素と一小藩邑にして隨て今日の如き繁榮を見ざりしが明治維新以來頓に面目を一新し蠶絲の集散地として活氣に富み、明治四十年四月市制を施行せられたのである。而して其の最も繁華なる處は本町、大町、裝町及淀賜町等にして大賈巨商軒を駢べ肆を列ね交通往來頻繁を極め、之に次いで中町、荒町、上町、萬世町及北町等主なる商工家連檐櫛比し且到る處電燈燦然として一段の光彩を添ひてゐる。

【福島縣廳及縣會議事堂】 縣廳舍は舊福島城址（杉妻町）に在りて北面し之と隣接する縣會議事堂（西面）と共に一時福陽の雙璧を以て稱せられ、南方阿武隈川に臨み、風景佳麗河流を隔て、渡利村辨天山の翠黛を望み、隣接議事堂構内亦數十株の櫻樹ありて花信の早到、正に城中第一を以て稱せられてゐる。

【縣社板倉神社及紅葉山公園】 紅葉山公園は縣廳舍の東隣、阿武隈川に沿ひたる處に在りて中央に盆地（舊城壕の遺址）あり、南方河流に臨める小阜上に縣社板倉神社あり、舊藩主の祖宗板倉重昌及重矩の靈を祀る處。園の規模頗る狹小なるも仍雨後の綠陰、霜後の丹楓、隈江の碧流と相映帶し、逍遙散策に適してゐる。

【辨天山公園】 市の南方に連亘する丘脈の最西部にして渡利村に屬し、頂上に天女の小祠あり、登臨すれば則ち對岸の市街を一眸の中に收め且つ遙かに吾妻小富士以下の峰巒を望むべく、街北の信天山公園と相對して風景佳絶、眺望富贍の名を博し、加ふるに近年登路に沿ひて數百株の櫻樹を植栽せられたるより花時の風景更に賞すべきものがある。而して上水道布設の爲丘上に配水池其の他の工事を施し尙南麓にも亦取入口貯水池其の他主要の工事を施してある。

【松齡鐵橋】 南、渡利村方面に通ずる大鐵橋にして結構壯麗實に市内の一偉觀を爲してゐる。長さ九十六間七分、濶さ三間、高さ最低水面上二丈二尺、橋上面積二百九十坪一合を算し、工費總額貳拾八萬九千八百餘圓の内、拾五萬圓の縣補助を受け大正十二年十二月工を起し十四年五月竣工したるものである。



信夫山公園　縣會議事堂　福島市大町通り

【岩谷觀音】 信夫山の東麓五十邊地内に在り、堂宇平凡他奇なきも境内頗る眺望に富み且つ數株の老櫻ありて春風蕾を破るの時艶麗人を招ぐの風情がある。

福島八景の中巖窟晴嵐を

大内青巒

文字摺の昔のあとをしのぶねの
晴れわたりたる色に見るかな

【縣社稻荷神社】 字宮町に在りて豐受比女命を祀る、境内清麗にして後方に藤架あり、又其の傍に明治戊辰の征戰に於ける官軍の參謀世良砥德（通稱修藏）の墓碑あり、神社の創建年代は之を詳にせざるも仍古碑に古祠なりと傳へ又現在の社殿は文祿年間の造營に係ると云つてある。

【中央公園】 前者の西に接續し一見附屬神苑たるの觀あり、故

に一に稲荷公園とも呼ばれてゐる、近年園内に大噴水塔を設けられた。

【福島地方裁判所】 字新町北に在りて福島縣内の司法事務を總管し、尙三ヶ所の支部と、六ヶ所の區裁判所と及三十五ヶ所の區裁判所出張所（登記所）とを統轄す、構内また福島區裁判所ありて福島市及信夫、伊達、安達の三郡を管轄してゐる。

【信夫山公園】 市街の北方十餘町、平衍なる田野の間に一丘陵の隆起せるもの即ち信夫山にして順德院の御製に

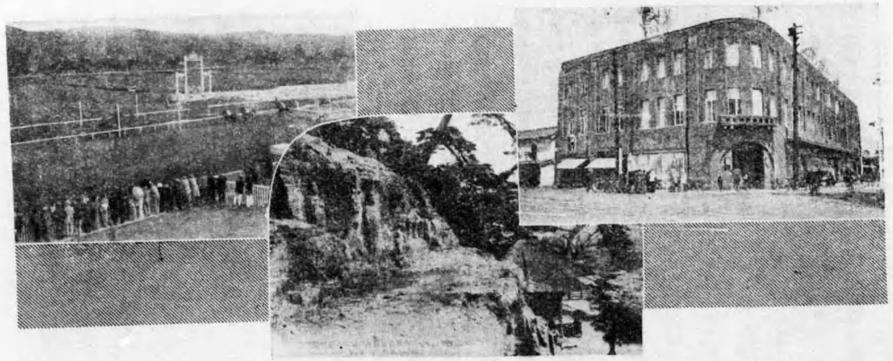
都には花も散りあへず隆奥の信夫の山は春風の頃（頃、一作吹く）

を首め歌人騷士の詠賦に入りしもの枚擧に遑あらず、頂上（通稱羽黑山）に羽黑神社あり、風景佳絶、眺望富贍、西南方の湯殿山と相對して信夫山中の勝景地である、而して公園は山の南腰、松杉鬱蒼として槃蔭濃に梅櫻楓械其の間を點綴して白雲紅霞相簇る處に之を設け、尙多くの花卉を移植し、加ふるに南面の登路、岩石磊砢、蹊隧崎嶇、攀躋に困むゝ雖も亦却て雅趣あるを覺えしむ、斯くて一たび園内に入るや南方田野を隔て・市街の連甍を一眸の中に收め、又仰いでは吾妻山の雄姿を望み、俯しては阿武隈川の巨流及須川の急湍を眺むべく眼界極めて廣濶である。

【縣社黑沼神社】 前記公園の域内に在りて蒼鬱たる老杉樹林に圍繞せらる、社殿素樸、景致幽邃にして一見其の古祠たるを想はしむ、祭神は即ち黑沼大神及石姫命にして尙命は欽明天皇の皇后なりゝ傳へられてゐる。

【官祭信夫山招魂社】 亦公園の北端に在りて前者の西に隣り、千樹の松林其の背後を繞り、萬朶の舞塲其面前に展び、壯大なる石華表を限界として南公園に接す、拜殿の側に招魂の豐碑あり、又庭前に明治二十七八年役の戰利巨砲ありて偉觀を極めてゐる。

【福島刑務所】 信夫山字狐塚に在り即ち福島地方裁判所管内の囚徒を收容する所にして二個の支所と二個の出張所とを管轄す而して本所は往年地方費支辨に



福島ビルデンゲ　岩谷觀音　福島競馬場

屬する時代に建設せられしものにして隨て間々建築物の頽廢甚しきものあるを見る。

【福島高等商業學校】 本市の西北信夫郡清水村大字森合の地内に在るも尙市内を以て目せられてゐる、大正十一年四月の創設にして校舍は同十三年完成を告げ、信夫山容の秀麗と其結構の輪奐とを相映發せしめつゝある

【電氣試驗場福島出張所】 字狐塚に在りて中學校の東に隣り、大正十一年の創設にして亦北郊の一偉觀を爲してゐる。

【福島停車場】 市街の西端榮町に在りて明治二十年鐵道開通當時の創設に係り、東北本線の主要驛に加ふるに奥羽本線の起點を以てするより鐵道省福島運輸事務所及保線事務所等の設置せらるゝあり、又附近幾多の蠶業地を控ふる爲旅客の乘降縣下第一にして貨物亦輻輳し實に東北有數の停車場である、而して鐵道開通までは此地方一帶田圃に

して市街は大體今の東安寺（早稲町）より常光寺（柳町）に至る南北線を西端とせしが爾後漸次發展して當に鐵道線路に接續せるのみならず、更に其西方にまで延長せられ以て今日の隆勢を現出するに至つた。

【福島ビルディング】 字本町の一角に屹立し一大偉觀を呈してゐる、四階建にして市有の建物である、二階は福島縣商品陳列所、三階には福島商工會議所あり、其の他は商店、集會所等である。

【日本銀行福島支店】 明治三十四年七月の創設にして字本町に在り、元來本市は蠶絲の集散地たるより其の時季に至れば則ち資金を要することゝ巨額にして隨て之が供給は地方銀行のみの能くし得る所でない、殊に所謂片爲替となれる爲商取引甚だ敏活ならざりしが此支店設置以來全く此の弊を除去し商況舊に倍し愈々隆盛に向ふを見るに至つたのである。

【市公會堂】 字松木田に在り、大正六年の建設に係る、建築雄大、南東二面田圃と相連れるを以て情趣頗る閑雅である。

【福島聯隊區司令部】 大字曾根田字齒抉柳に在り現今縣下全部を管轄してゐる

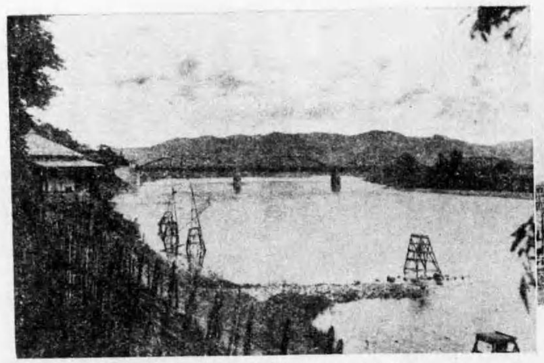
【福島縣師範學校】 大字腰の濱字高田に在り即ち大正十一年新に規模の宏壯なる校舍を此に建築して翌十二年四月舟場町なる舊校舍より移轉開校せしものである。

【福島競馬場】 大正五年の創立に係る公認競馬場にして大字腰の濱に在り、毎年春秋二回競馬を行ふ時市内の段賑平時に倍徒す、而して之か經營者たる福島競馬倶樂部は即ち社團法人組織にして基礎亦頗る鞏固である。

【其の他】 主なる官公署、學校會社、病院等を擧ぐれば左の如し。

福島警察署、福島郵便局、福島營林署、福島測候所、農林省蠶業試驗場支場福島縣女子師範學校、縣立福島中學校、縣立福島商業學校、縣立福島高等女學校、福島訓盲學校、福島縣圖書館、福島縣農會、日本赤十字社支部、愛國婦人會支部、福島育兒院、武德殿、福島成蹊女學校、福島民報社、福島新聞社、福島毎日新聞社、福島民友新聞社、公立福島病院、大原病院、福島電燈株式會社、山八銀行、福島縣農工銀行、山十組製絲場又劇場常設活動寫眞館として新開座、福島座、桑館、大正館、オデオン館等あり。

福島縣農工銀行



紅葉山より松齡橋を望む

信夫郡

東及北に伊達郡を繞らし南は安達郡に隣り、西は吾妻山脈を隔てゝ耶麻郡及山形縣と境し東西五里、南北五里十八町、面積三十二方里六六三、戸數一萬二千九百、人口九萬七千四百、地勢、東部は平地にして福島市を包擁し、土地肥沃、交通至便、二町、二十四ヶ村、主要物産は米穀、繭生絲、織物及蠶種等にして尙白土及硫黃等をも産出し又梨及櫻桃の産地として有名である。

【飯坂町】 福島市の西北二里十町に在りて郡の極北に位し、對岸の伊達郡湯野村と共に溫泉の

湧出地として其の名高く、而して市より此地に達する道路は極めて平坦にして且電車及自動車の便あり、又汽車に由つて伊達驛に下車するときは僅々三十町に過ぎざるのみならず更に電氣軌道の通ずるありて復た一歩の勞をも要せず、戸數千百五十、人口五千七百七十を有し旅館浴舍の設備等亦完具して心身の靜養に適してる、又町内には警察署、衛戍病院療養所、鐵道療養所及娯樂場を設けられてある。

【飯坂温泉】温泉は鯖湖湯、透達湯、波來湯、瀧の湯、赤川湯、赤川端湯、金瀧湯及天王寺湯等に分れ、泉質は共に無色清澄なる弱鹽類泉にして亞爾加里性を微してる、土地は高燥にして摺上川に臨み、對岸の湯野温泉と長坤に相望む此間を聯絡する十綱橋は古歌にも

陸奥の十綱の橋に繰る綱の絶えすもくるといはれたるかな　（千載集）

みつからはくると見し間に陸奥の十綱の橋の中は絶えにき　（新續古今集）

等と詠まれし名橋にして尙昔時は所謂短舟（今の岡田式渡船の如きもの）なりしが明治七年宮城吹上御苑の釣橋を模倣して架設したる橋梁が起源だと云つてゐる、橋下亦奇岩怪石に富み水流之に激して波浪瀧淘湧し風致幽邃覺えず人の心身を清爽ならしめてる、千人風呂、樂天地、小瀧及赤川には廣大なる浴槽がある。

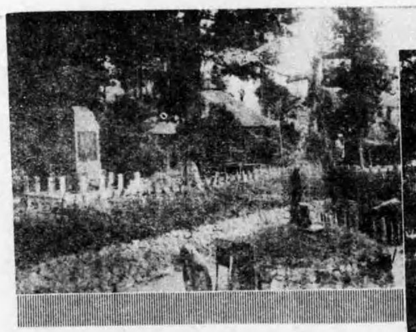
【鵬公園】舊丸山と稱へ文治五年石那坂（或云厚樫山）にて戰死せし信夫莊司佐藤元治の城壘にして飯坂町の西北に在り風光幽邃である。

【佐藤繼信、忠信の墓】飯坂町の西南七八町なる平野村大字井佐野眞言宗醫王寺内に在りて其父元治の墓と相髣髴んである。當寺には尙義經、辨慶及元治の遺物を傳ふるものがある。好古の士若し此に遊ばゞ宜しく就いて一覽すべきである。

笈も太刀も五月に飾れ紙幟　　芭蕉

又寺域内に『虎の尾』と稱する老松ありて、其の樹容の奇異を以て世に聞えてゐる。

飯坂温泉



文字摺觀音

【國府臺址】鎌田村大字鎌田と餘目村大字宮代との交界點に在り、東西約二町餘、南北約一町五十間、今變じて田疇、民居となるも遺形尙認むべきものがある、永承中源鎭將賴義の築く所と傳ふるも板倉復軒（通稱九右衛門）は之を養老二年五月石城石背建國以前の陸奥國府にして且爾後神龜年間までの石背國府地なるべしと考證し他の考古家亦多く之に左袒してゐる。

【瀨上町】福島市の北方一里半に在りて國道に沿ひ、戸數四百七十、人口二千六百七十を有する小宿驛である、蠶業隆盛地方の中心を成し活氣を呈してる、摺近時鐵道東北本線瀨上驛の設置を見一層交通の便を加ふるに至つた。此の地また『瀨上節』で名高い。

瀨上節

永い長岡摺上越えて、たまあに來たのに歸さりよか。

あの山越えれば福島見える、なぜに福島山のかげ。

瀧上街道に白菊植へて、何を問く〳〵便り聞く。

【信夫文字摺】 文字摺の古蹟は福島市より東北約一里、岡山村大字山口に在り丘阜に倚り、合龍鐘樓の木末に隱見するもの是即ち文字摺觀音の境域にして其下方に所謂文字摺石が在る、古來麥葉を以て此石面を摩すれば則ち相思の人の面影現るゝと傳へ、尙河原左大臣（源融）及大磯の名妓虎女の戀愛、追慕譚等を附會してる、是固より俗說にして取るに足らないものであるが昔時調布等に用ゐし信夫毛地摺は即ち此石面にて摺り其文樣の纒捩せし形容より之を捩摺と呼びたるものとの傳說は强ちに排斥すべからざるもの、如く、隨て『もじ』と讀むべき『文字』の二字を擬するは妥當でない、今福島市及郡部よりハンカチーフ等に河原左大臣の詠歌即ち

陸奥の信夫もぢ摺誰ゆゑに亂れそめにしわれならなくに

を惹草及綾石文と共に摺り之を信夫摺と稱して販賣せるは即ち此古蹟に因めるものである。

【吾妻山】 郡の西端に聳ゆる雄峰にして本縣耶麻郡及山形縣に跨れる吾妻富士（海拔千七百三十米）及一切經山（海拔千九百九十米）等の火山群を總稱し、明治二十六年五月十九日山腹爆發し慘狀を極めたるものである。

【高湯溫泉】 福島市を距る西方四里、吾妻山の中腹に在り、酸性泉にして地は庭坂村に屬し、福島市より庭坂驛まで汽車（奧羽本線）に由ることを得べく、隨て庭坂よりは僅に二里の行程に過ぎない、而して地高く氣淸く眼界亦淵くして福島市及信達二郡の山川風物殆ど一眸の中に收まり避暑に適してゐる。

【土湯溫泉】 福島市より西南四里餘、土湯村に在りて縣道福島土湯線の終點に當る、口碑に往古聖德太子の侍臣秦川勝、太子の令旨を奉じて東下の時偶々半身麻痺の疾に罹りしに護持し來りし太子自作の尊像、夢裡に『此溫泉に浴せば治せむ』と告げられたと傳へられてゐる、故其發見は太だ古きものと思はれる（今村內興德禪寺に安置せらるゝ、太子の木像は即ち是であると云ふ）泉質は鹽類性硫黃泉に屬し無色透明して硫化水素の臭氣あり、又附近に思の瀧、女沼等の勝景ありて雅人に探訪せられてゐる。

【微溫湯溫泉】 福島市の西方四里半、水保村地內吾妻小富士の東麓に湧出する低溫の硫黃泉にして眼病及濕毒の類に奇效あり、泉は雲霧の變幻極まりなき高山の平腹に在りて雜木叢生の間に茅茨の浴舍を隱見する處自ら他の溫泉場と別異の趣致あるを覺ゆ。

【黑岩虛空藏】 福島市の南方一里餘、杉妻村大字黑岩に在りて臨濟宗滿願寺に屬し、堂は寺域の東端に在りて阿武隈川に臨み、奇岩列び奔流激し、古松老杉鬱蒼として頗る幽邃の景趣あり、相傳ふ嵯峨天皇の弘仁二年僧某之を創建し尋て寬永中上杉氏の臣古川重吉之を再建したるものであると云ふ、堂側の岩壁に刻文あり又堂後の岩上に十六羅漢の石像散坐してる、此地岩石皆黝黑色即ち地名の因つて起りたる所以であると云つてゐる。

【官公署、學校等】 渡利村に縣立福島蠶學校及福島縣工業試驗場、淸水村に縣立信夫農民學校等置かれてある。

伊達郡

本郡は所謂中通の北端に在りて、北は宮城縣、西は山形縣に界し、東は相馬郡、南は信夫郡及安達郡に隣接してる。阿武隈川及其支流の沿岸地帶は概ね平衍にして萬頃の桑園到る處に展開し、廣袤東西九里五町、南北七里十八町、面積四十四方里二〇八にして七町、三十六ヶ村より成り、戶數二萬千三百八十、人口十二萬九千七百八十を有し、而も其戶口の多きこと縣下各郡中の第二位に在り。加ふるに梁川附近は養蠶業の隆盛を以て、又川俣地方は輸出羽二重の生產を以て共に古來世上に聞えてゐる。物產は羽二重の外尙蠶種、生絲、節絹、眞綿及金銀等を出し米穀の產額は約十萬石に及んでゐる。

【桑折町】 福島市より陸路三里餘、鐵道停車場ありて（東北本線八哩三）大正十五年六月までは伊達郡役所を設けられてあつた。戸數七百七十、人口三千八百七十を有し、町内に警察署及蠶業取締所支所あり又株式會社山八銀行ありて商業及蠶業共に頗る般盛である。

【御陰の松】 桑折町淨土宗無能寺に在りて綠蔭殆ど全庭を蔽ふてゐる。明治十四年八月再東巡中の車駕駐蹕の際宸賞に懷ひて特に賜名の桑に預りし老松である。當時隨駕の杉官内大輔は乃ち左の一首を詠進られた。

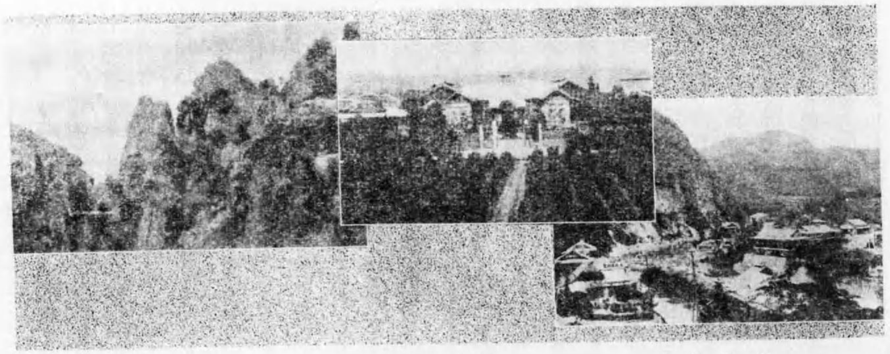
大君の御蔭の松の深みどり夏も涼しき色に見えつゝ

【湯野温泉】 湯野村に在りて摺上川に臨み、對岸の飯坂温泉と艮坤に相望み、泉は橋本湯切湯及狐湯の三者に分れ、泉質略飯坂温泉に同じく、且景致に富んでゐる。旅館の多くは河岸に倚りて岩壁の上に刻し、浴後欄に倚らば則ち眼下の清流と共に對岸の奇勝をも賞することが出來る。全村總戸數七百二十、人口四千二十を算してゐる。

【愛宕山公園】 湯野温泉北方の小丘にして、もと國司北畠顯家の故墟であると傳へてゐる。丘上に祠堂あり。而して公園は丘の南麓に在りて古松老櫻奇岩怪石の間を點綴してゐる。

【穴原温泉】 湯野温泉より摺上川に沿ひて上ること約半里、湯野村大字穴原に在りて河流に臨み、欄前奇岩怪石の間溪流潺湲を作し、地閑に氣清くして最も避暑に適し浴客極めて多い。

【湯野堰開鑿の碑】 同所に在り、上杉氏の代官古河善兵衛（重吉）が前任者佐藤新右衛門（家忠）の志を繼ぎ私財と身命とを賭して開鑿したりしものにして其水渠の延長七里に及び工費亦大凡十六萬兩を投じたと傳へてゐる。地方民碑を建て功を紀した。實に寛永十年六月二十三日である。越て明治十八年八月其遺澤の鴻大なるを德として、更に同村字高畑に祠を建て靈を祀る。今の鄉社西根神社は即ち是である。



穴原温泉　蠶業試驗場　靈山

【梁川町】 桑折町の東方二里餘に在り、東に靈山を控へ、中央に廣瀬川を帶び、戸數一千百五十人口六千六百七十に過ぎざるも附近養蠶業の隆盛なるより南方羽二重の產地川俣と相對して其名高く、隨て收繭の時季に至れば則ち商業活氣を呈し、市街般賑を極める。町内に縣立蠶業試驗場、蠶業取締支所、警察署及伊達郡蠶種同業組合立蠶業講習所等あり又古蹟としては伊達氏の故墟たる鶴ヶ岡城址ありて今公園地に供せられてゐる。

【別格官幣社靈山神社】 靈山は桑折町より東方四里半、伊達郡と相馬郡との境界に在りて靈山村に屬し、海拔八百餘米、怪岩奇石森然壁立、遠く之を望めば劍戟空を刺すが如く見ゆる、土人或は古歌に謂ふ所の人不忘山是と稱するも識者は之を否定してゐる、唯山名の貞觀元年慈覺大師開山の際、天笠の靈鷲山に擬して靈山と號せしより起ると

云ふことは即ち信憑するに足る、而して此山は元弘年間、國司兼鎭將北畠顯家が陸奥太守たる皇子義良親王（後の後村上天皇）を奉じ據つて以て東北を鎭撫せし臨時的國衙兼鎭府にして其の遺址今尙存在してる、又神社は山蔦なる大字大石地内に在りて明治十二年の創建に係り北畠親房、顯家、顯信及守親の四卿を祀り尋で同十八年四月別格官幣社に列せられたのである。

【保原町】　桑折町の東南方一里餘に在り、亦養蠶及眞綿の主産地を以て著る、戸數千百六十、人口六千四百五十を有し、商業殷盛、町内に縣立中學校、蠶業取締所支所及警察署等ありて郡中部の要衝に當つてゐる。

【掛田町】　桑折町の東南三里に在る山間の一小邑にして戸數六百五十、人口三千四百七十を有するに過ぎざるも仍養蠶業隆盛、加ふるに附近に於ける製絲業亦盛にして、元掛田折返絲の名は本縣輸出生絲の代名詞として其の名聲高く、安政年間既に英佛兩國に輸出して聲價を博した。

【川俣町】　桑折町の南方七里に在りて郡の南端に位し、鐵道の便あり、戸數千五百五十、人口八千五百を有し其多きこと正に郡内第一位である、地もと僻陬であるが附近輸出羽二重を産出するより夙に機業地として世に知られてゐる又町内に國立輸出絹織物檢査所、工業試驗場分場、染織學校及警察署等ある。

【阿武の松原】　伊達停車場の東方約一里なる伏黑村大字箱崎に在りて本邦三松原の一と稱したるも今一株の老松僅に其蹟を傳ふるのみである。

陸奥のおもひしのふにありながら心にかゝるあふの松原。　太宰大貳長實

【葛の松原】　桑折停車場の西方約一里なる睦合村大字松原に在りて亦本邦三松原の一と稱した、今は田疇と化して一株の古松僅に其遺蹟を標するのみである保元中、覺英僧都（後二條關白師道の子）流落し此に來り林中の松樹を白して昔は應理圓宗の學徒として公家の梵筵に連り今は諸國流浪の乞食として終を葛の松原に取る。

世の中の人には葛の松原と呼ばるゝ名こそ嬉しかりけれ。

于時保元二年二月十七日權少僧都覺英生年四十一、申の刻に終りぬ。

と書して樹下に死した、後年白河侯樂翁之を弔訪して左の二首を詠した。

雨もよし雨なきときは月を見る心に河かくすの松原。

月日のみたたいたつらに送り來て身の愚さをくすの松原。

【義經腰掛松】　藤田停車場の北東約一里なる藤田町大字石母田に在りて源廷尉義經奥に入るとき此處を過り、此の根に倚りて憩ひたと傳へてゐる、傍に古石祠あり義經社と云ふ、又附近に母衣懸松及辨慶の硯石等と唱ふるものありて皆當時の遺蹟と稱してゐる。

【厚樫山紐關址】　藤田停車場の北東約一里半、大木戸村大字貝田に在りて宮城縣刈田郡に跨る山形風字狀を成し、其荒地勢隆起、峻坂重疊、號して伊達の大木戸と曰ふ、而して木戸は即ち關塞にして古の所謂下紐の關是である、昔坂上將軍夷賊を此處に防ぐこと傳へてゐる、文治の役藤原泰衡の異母兄西木戸國衡等亦據つて以て源頼朝の軍を禦き乃ち厚樫山と國見澤との間に長塹を鑿ちて阿武隈川の水を引きしものにして其塹跡今尙存じてゐる。

立かへり又や隔てむ今宵さい心もとけぬ下紐の關　（新續古今）　左大將公名

現とも夢とも見えぬ程はかり通はゝゆるせ下紐の關（新後拾遺）　大中臣能宣

【伊達氏の墳墓】　氏祖常陸介中村朝宗の墓は睦合村大字萬松寺桑折驛の北約半里に十二世兵部少輔伊達成宗の墓は小坂村（同驛の北約一里）に在り、伊達氏は朝宗以來本郡を以て本據と爲すこと十五世の久しきに及びたるものである。

安　達　郡

北は信夫、伊達の兩郡に隣り南は安積郡及田村郡に接し、西は安達太良山脈を限りて耶麻郡に境し、東は縣道川俣、浪江線に由りて雙葉郡に通じてゐる、東西十二里十八町、南北五里、面積四十三方里零八六にして三町二十五ヶ村より成り、戸數一萬五千九百十、人口十萬千二百八十を算し、中央阿武隈河畔一

帶の地は概ね平坦なるが東部及西部は共に山嶽の連亘起伏してゐる、物産の主なるものは蠶繭、生絲、蠶種、羽二重、製紙、米穀及馬匹等にして就中製絲業は縣下第二に位してゐる。

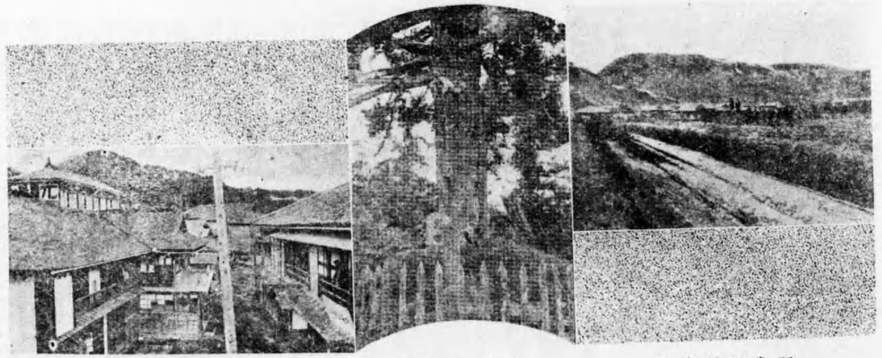
【二本松町】福島市より南方五里（鐵道十三哩九）郡山市より北方六里（鐵道十四哩七）に在りて、國縣道及び鐵道の要衝に當り、交通至便、商工業殷盛にして戸數千七百七十、人口九千百八十を有し、大正十五年六月までは安達郡役所があつた、而して此地は寛永以來丹羽氏（十萬石）の城邑にして白河以北の巨府にして其の名聞えてゐる町内には縣立中學校、蠶業取締所支所及警察署等を置かれて郡中第一の首邑である。

【霞ケ城址】二本松市街の背後なる高丘に在りて其前面は丘の支脈に掩蔽せられ僅に獨夫主臺址の丘頂を蒼翠の木末に標出するのみである、北朝の康永中足利氏の族畠山氏奥州探題に補せられ此に城きて數世傳襲せしが天正十三年伊達氏の討滅する所と爲りて正祀絶え尋て蒲生氏の會津に封ぜらるゝに及びて此地亦同氏に歸し、爾後尙數次の變革を經て德川幕府の時に至り寛永二十年より丹羽氏の封邑と爲り以て明治維新の際に及んだのである、舊城は戊辰役の兵燹に罹りし爲今は唯敗壘堞壕の跡を留むるのみてある。

【黃庭堅戒石の銘】霞ケ城址に在り、丹羽侯の儒臣岩井田慎岳が寛延二年三月城内の天然石に宋の黃庭堅（字は魯直、山谷と號す）の箴銘『爾俸爾祿。民膏民脂。下民易虐。上天難欺。』の十六字を刻せしものにして爲に斯く通稱せられたのである。

【嶽温泉】二本松町より西方二里餘、嶽下村大字高越地内安達太良山麓に在りて一に深堀温泉とも呼ばれてゐる、泉質無色透明にして硫黃を含み、慢性諸症に效あるを以て浴客多い。

【本宮町】二本松町の南方二里餘（鐵道六哩）に在りて亦國道及鐵道の要衝に當り、尙縣道福島新潟線の起點である、戸數千二百八十、人口七千九十を有し



福島縣種畜場　安達ケ原黑塚　熱海温泉

郡中第二の巨邑たるより夙に警察署を置かれてある、而して鐵道磐越西線の開通前は會津地方の物貨集散地として商業殷盛の名を博した、又町名は當地所在の安達太良神社が一郡の鎭守にて本宮と呼ばるゝより起りしと傳へてゐる。

【福島縣種畜場】本宮町の西方三里高川村大字石筵に在り、明治三十五年の創設にして種馬の育成並に種付及び飼料の試驗講習指導、預託育成等馬格の改良發達を目的としてゐる、種牡馬は各馬種に適應せしむる爲數種を飼育し民間の希望に應じ各地にて有料種付を行ひ以て馬格の改良發達を行ひつゝあり、又近年更に緬羊及び牛の飼養を試みは亦相當の成績を收めてゐる。

【熱海温泉】磐越西線岩代熱海驛下に在りて高川村大字高玉に屬し、泉は田圃の間より湧出して頗る低温なるより更に人工温度を加へて入浴に供してゐる。

【安達ケ原】　二本松町の東方約二十町、阿武隈川の對岸太平村に所謂安達ケ原の遺跡と稱する丘阜がある、此地往古良弓（即ち檀木製）駿馬即ち安達駒を出して朝貢に充てたと傳へてゐる。

陸奥の安達の眞弓君にこそ思ひためたる事もかたらめ（後拾遺）　中將實方朝臣

陸奥の安達の眞弓取ためし其につ世かぬ名をなけきつゝ（新葉）　前大納言守親

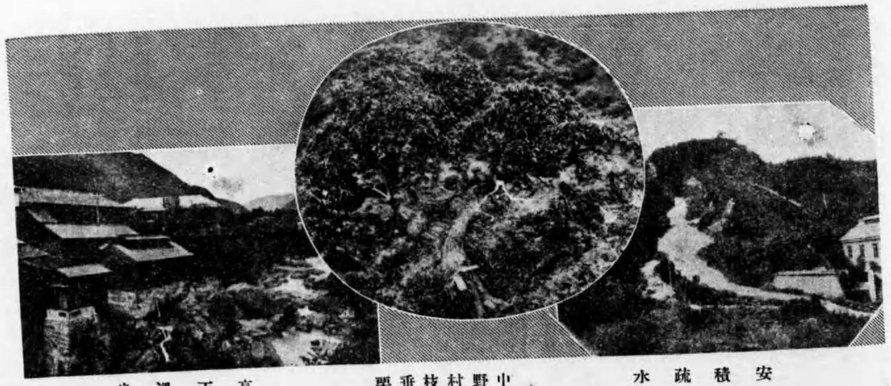
又民居の傍に黑塚と稱する古墳ありて所謂鬼婆の墓なりと傳へ、一株の老杉樹下に平兼盛の

陸奥の安達の原の黑塚に鬼こもれりと聞くはまことか

の一首を刻せる小碑が建つてゐる、然れども此歌には即ち『みちの國名とりの郡黑塚といふ所に重之か妹あまたありと聞つけていひかはしける』との詞書ありて所謂遙詠なれば是を以て證左とするに足らないのみならず識者は夙に之を後人の擬作と做し尙觀音寺所藏の古器物及び其傳說等を一噱に付し居る、而して所謂安達ケ原は今、岩ケ峯公園として地方人の遊覽地となり春櫻秋楓の美觀を賞されつゝある。

【小濱町】　二本松町の東南二里に在り、郡東の一名邑にして舊稱鹽松（一書四本松）と曰ひしが中世大內氏が若州小濱より來りて一城を構ふるに當り舊居の地名を移して今の如く改めたるものである、戶數一千四十、人口六千四十を有し蠶絲業の隆盛を以て聞えてゐる。

【安達太良山】　二本松町の西方に聳立する郡內第一の高山にして標高一千七百米と註せられてゐる、信夫郡吾妻山及耶麻郡の磐梯と相並立して鼎足の勢をなし、往古日本武尊登臨して『嗚呼可惜』と宣ひたりしより山名起りたるものと傳へられてゐる。尙方俗二本松嶽、西嶽、安達嶽安達太良嶺、嶽山及太華等とも呼んでゐる。又山の半腹に所謂沼尻硫黃坑がある。



安積疏水　中野村枝垂栗　高玉溫泉

安積郡

本郡は縣の中央に位し、北方安達郡と南方、岩瀨郡との間に挾まれ、東に田村郡を控へ、西は猪苗代湖に瀕して、耶麻、北會津の兩郡と境し、尙東端に郡山市を抱く、東西八里十八町、南北四里五町、面積二十七方里三二三にして一町十八ケ村より成り、戶數七千百七十、人口四萬七千三百五十、地勢東部は概ね平衍にして殊に阿武隈川及其支流沿岸の地帶には肥沃の田野到る處に展開するを見る、物產は米穀、蠶繭、蔬菜及木炭等を主とし就中米穀は年產額十一萬石以上である。

【安積沼】　日和田町大字日和田東勝寺の後に在る耕地を其蹟なりと傳ふ、古來名所として

陸奥の安積の沼の花かつみかつみる人に戀渡るらむ（古今集）

を首め歌詠に入つてる、尙一條天皇の朝、中將實方朝臣陸奥守

を許して赴任の途此處を過ぎりし時、恰も端午の節に當りたるに菖蒲なかりし爲花勝見を以て軒に葺かしめたりと傳へてゐる。

【安積山及山の井】 安積山は郡の西北嶺（標高九百八十米餘）にして河内村に屬し、一名額取山と云ふ、又山の井は其東麓に在る方二間許の野泉にして片平村に屬し、尙其傍に所謂采女塚ありて其墳墓なりと傳へてゐる。萬葉集に

あさか山影さへ見ゆる山の井の淺き心はわれ思はなくに　前采女

の古歌亦古今集序には下句を『淺くも人を思ふものかは』に作る等一定してゐない。

【淨土松】 郡山市の西方三里、多田野村字白石に在りて長者の宅址と傳へ、道路平坦にして車馬を通ず、奇岩怪石の點在せるもの無數にして其上に桑松の偃蹇蟠屈するあり、其景宛も干潮時に於ける松島の如く世人之を呼んで小耶馬溪と謂ふ。

【有模範林】 縣は明治三十八年以後日露戰役記念を兼ねて模範林を造り以て植林上の範を示し、同時に林業の收益を周知せしめ、併せて縣有財産を增殖するの目的を以て丸守村大字安子ヶ島附近の二千三百餘町歩に模範林の造成を企てたものにして爾後之が經營に縣は最善の努力を盡してゐる。

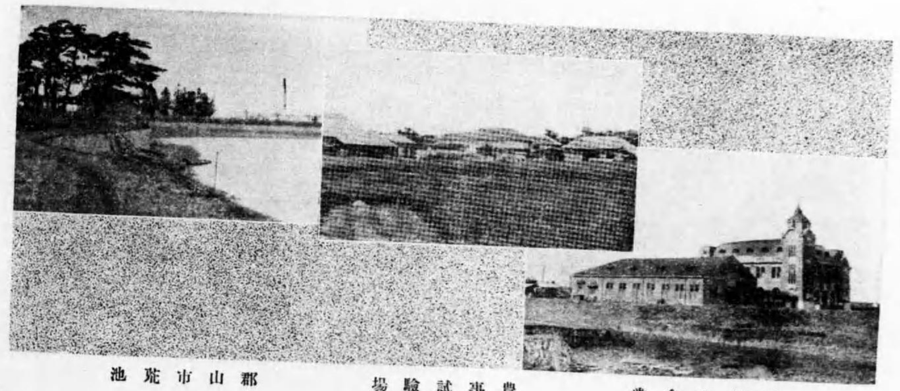
【枝垂栗】 中野村にあり、幹圍十尺八寸、樹高凡そ二十二尺、樹枝悉く下方に垂下し宛然枝垂柳に似たり、天然記念物である。

郡山市

本市は大正十三年九月一日市制を施行したるものにして東は阿武隈川に沿ひ他の三面は安積郡に圍まれ、面積零方里八一〇、戸數八千六百四十、人口四萬六千六百四十を有し、尙前途大に發展すべきものと豫想せらる、而して本市はもと二本松領内の一小驛次に過ぎざりしが明治維新後漸次進運に向ひ彼の有名なる猪苗代湖疏水事業の竣功するや産業年々興り、商業歳々振ひ、加ふるに所謂四通八達の交通機關が之を促進助長するありて遂に今日の大郡山を成したるものである、今や其疏水を利用して電燈を點じ電力を用る又上水道を設けてゐる市の中央に東部電力株式會社郡山支店の五層ビルディングは屹立し、公會堂は西部に在りて建築雄大一大偉觀を呈し、大賈巨商亦軒を駢べ肆を列ね且地方專賣局及各種の製造工場ありて商工業殷賑を極む、又大正十五年六月までは安積郡役所の所在地として地方の中樞を成し尙裁判所、警察署、郵便局、縣立中學校、農事試驗場、土木監督所及蠶業取締所支所等樞要機關の所在地である、又鐵道東北本線及磐越東西線は本市を中心として東西南北し、國縣道亦殆ど之と並行するより旅客の來往貨物の集散極めて多く、隨て商工業の發展は實に目覺ましきものである、且殆ど縣の中央に位する爲市民は更に福島を凌いで東北

郡山市街

郡山市開成山



郡山市荒池　　農事試驗場　　郡山公會堂

商工界の覇權を握らんと期しつゝあり、又更に隈東より水戸地方に交通すべき鐵道大郡線は近々全通を見るに至らんとしてゐる、市役所は近年の新築に係り宏壯稀に見る建物である。

【郡山郡山地方專賣局】　市街の西南方に在りて本縣の大部を管轄し其建築の宏壯奥を以て稱せらる、即ち管内産出の葉煙草を主とし刻煙草（さつき以下）及巻煙草（敷島、朝日）を製造する所にして大藏省の所管に屬し多數の男女工を使役して盛に操業しつゝあり。

【開成山】　市街の西方約二十九町、舊桑野村に在る公園地帶の總稱にして此地方開拓の際易の繫辭に所謂『開物成務』の語意に取りて名づけたのである、園内の小丘上に在る祠廟は縣社開成山大神宮にして明治九年勅許に依り伊勢大廟の御分靈を勸請せしもの、境内蓬嶽、殿宇清楚にして神威赫奕である、此地西

北には安達太良等の連山を望み、東南亦移、大瀧根及蓬田等の諸峰を眺め、又附近は開拓せられし千項の田圃一畔の間に展開してゐる。尙祠廊下には三泓の鏡池ありて五十鈴湖と呼び、周圍約一哩堤櫻爛漫の花影を蘸して公園に一段の美觀を添へてゐる。

【競馬場】　春秋二季開成山公園第一鏡池の周邊（汀渚）を利用して之に充てゝゐる。而して此競馬は產馬畜產組合聯合會が馬匹改良の目的より春は櫻花爛漫の時を卜し、秋は金風蕭颯の節を期して開催せらるゝものにして隨て縣下產出の駿驥驛駬は殆ど來り會せざるものなく四來の觀客亦無慮數萬、其壯觀實に地方稀に見る所のものである。

【縣立農事試驗場】　市街の西北方に在りて種藝部に於ては水稻、麥類、菅菽類陸稻、粟、甘藷の試驗を園藝部に在りては蔬菜、果樹試驗を農藝化學に在りては肥料土壤試驗及施肥標準調査病虫部に在りては病虫害の試驗を爲すの外特に馬齡畧僞瓢虫蒟蒻病の試驗に從事してゐる。

【縣社安積國造神社】　市街の西端に在りて和久產巢日神、品陀和氣尊、稻倉魂命、天湯津命及比止禰命の五座を祀り、其中比止禰命の阿尺國造たりし緣由より明治維新後今の社號に改めたのである。

田村郡

安積郡の東部に在りて、北は安達郡、南は石川郡に接し、東は雙葉、石城の二郡に境し、東西十里五町、南北七里三十二町、面積五十四方里九〇七にして四町二十七ケ村より成り、戶數一萬七千八百二十、人口十萬六千七百四十を有し、地勢阿武隈川沿岸の地帶、僅に平衍なるのみにして他は概ね丘陵起伏の間に小平野の散在するを見るに過ぎず。古來馬匹及葉煙草を產するを以て名あり世に三春駒及三春煙草と稱せらるゝもの即ち是である。仍主要產物としては米麥、蠶繭生絲、葉煙草、馬匹、石灰石、石材、木材及薪炭等にして就中石材は

産額豊富色澤美麗、建築及裝飾用材として世人に珍重せられてゐる。

【三春町】 郡山市の東北約三里に在りて郡の西北部に位し、晩春梅櫻桃の三花一時に開くより三春の名起るゝ傳へらる。正保以後に於ける秋田氏（五萬石餘）の城邑にして戸數一千六百五十三、人口七千八百十九を有し、大正十五年六月までは田村郡役所があつた、地勢四面丘陵に圍まれて殆ど別乾坤を成してゐるも。近年鐵道磐越東線の開通以來交通の便大に開け、安達郡本宮町亦西北三里餘に在りて縣道に由り相連絡してゐる。町内には地方專賣局出張所、縣立中學校蠶業取締支所及警察署等あり。又左の如き民謠がありて盛に唄はれてゐる。

サイヤー梅桃櫻が一度に開く、ハアー三春御城下ホンニナー花の里
サイヤー月の明で山道越えて、ハアー歌で三春にコラナンダイナー駒買ひに
サイヤー奥州三春に庚申坂なけりや、ハアー旅の馬喰もホンニナー金のこす

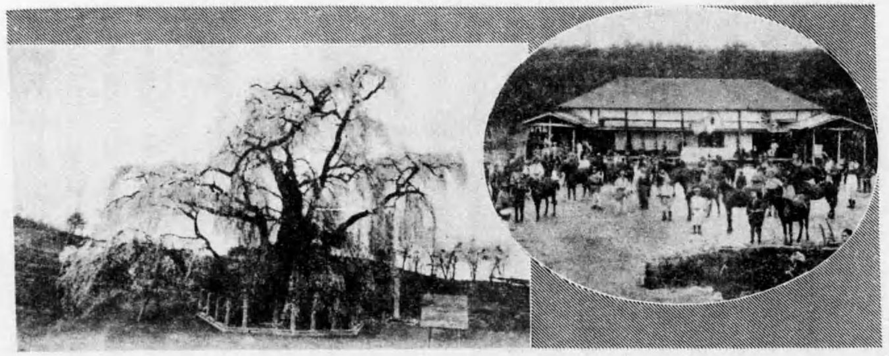
【舞鶴城址】 三春町の東端に屹立せる高丘にして往昔大志多山と稱せしが永正元年田村義顯（田村麿の後裔と云ふ）此處に城きて舞鶴城と號け守山城より移りて之に居る。天正中田村氏傾覆の後蒲生、松下（共に會津の屬將）等の諸氏を經て德川幕府の時に至り、秋田氏常州宍戸より移封し來りて亦世々此に居城せしが明治維新後民有に歸し現今は三春小學校の附屬用地となつた。頂上四望開豁風景亦雄大である。

【瀧の櫻】 三春町の東南一里餘、中郷村大字瀧の圃間に在る老櫻にして高さ四丈二尺、圍三丈二尺餘、絲枝地上に垂下し花色淡紅にして風姿雅美、眞に賞すべきものである。天文年間の栽植にして大正十一年史蹟名勝天然記念物保存法第一條に依り指定せられた。三春侯歴世之を珍愛した。爲に土俗之を『御殿櫻』と呼び

瀧の櫻にや手は屆けども御殿櫻で手折られぬ

との俚謠を傳唱するに至つたのである。又京紳の和歌數首あり左に其一を掲ぐ

都まで昔に聞えし瀧櫻色香を誘へて花の春風　大炊御門前内大臣經久



馬市

三春瀧櫻

【常葉町】 三春町の東方四里に在りて縣道常葉浪江線に沿ふ、戸數八百、人口五千二百九十を有するに過ぎざる小宿驛なれども古來良馬を產するを以て名あり、所謂三春駒は此地附近より產出せしものにして本郡内に於ける馬匹の生產地である。又葉煙草の主產地である。故に地方專賣局出張所を置かれてゐる。

【守山町及蓮田】 町の中樞たる大字守山は三春町の西南約五里に在りて、全町の戸數八百、人口五千二百十を算し、亦郡中の名邑である。城址は往昔將軍田村麿東夷征討の時築きし所と傳へられ其後裔と稱する田村氏の三春築城までは累世の居城に供せられたと云つてゐる。町の西北端なる大字德定に富豪佐々木氏の蓮田あり、苗代跡を利用して栽培せしものなるが其面積の廣大を以て世に聞えてゐる。

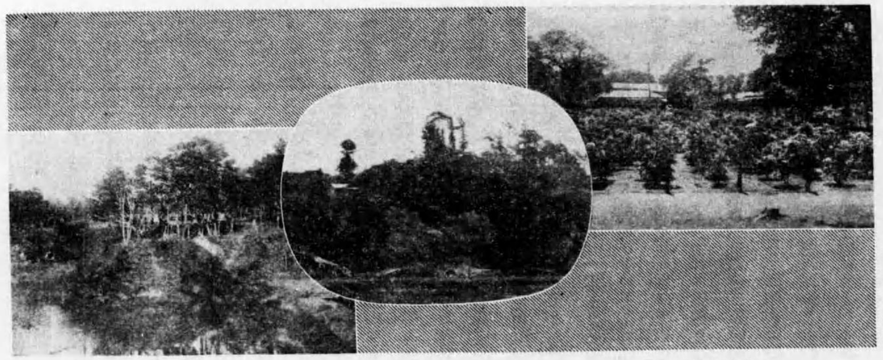
【縣社田村神社】 守山町大字山中の一丘に在りて天之御中主神

外四座を合せ祀る（坂上田村麿亦其一座たり）大同年間將軍田村麿の創祀する所と傳へ、境内廣豁にして老樹鬱然疊立し、社殿の結構亦極めて古雅である。昔時は大元師明王と稱し、佛寺の管理に屬して祀田三百石を有せしが明治維新後神職の管理に歸し諱で大正十年縣社に列せられたのである。

【小野新町】 三春町の東南六里餘に在りて鐵道磐越東線中の主要驛に當り、戸數千百、人口五千五百五十を有し、地方專賣局出張所、縣立蠶業試驗場支場及警察署等ありて、三春町に亞ける繁華の市街地である。住昔陸奥守小野篁此地に留まりて土民を綏撫啓發せしより此名起ると傳へられ、附近の村落亦多く其名に『小野』を冠してゐる。

【東堂山觀世音】 小野新町停車場より西北里餘、飯豊村大字小戸神に宛然尖塔狀の密林丘あり、是東堂山にして有名なる觀音堂は其東腹に在り、桓武天皇の朝坂上將軍田村麿東夷征討の勅命を奉じ來りて大瀧根山塞の夷賊を攻擊せし時此山に登りて觀世音菩薩に祈誓し其冥護に賴りて賊巢を勦滅し得たりしかば其の御恩を報謝し、併せて陣沒せし人馬の追福に資せんが爲大同二年（平城天皇の朝）高僧德一大師を講じて開山と爲し一寺を創めて滿福寺と號け大師自作の聖觀世音勝軍地藏、毘沙門及不動等の靈像を東面の一堂内に安置し其堂宇の方向に因みて東堂山と命名した、又此觀世音は古來駿馬の蕃殖に靈驗ありて遠近よりの養客殆ど絶えることがない。

【大瀧根山】 郡の東端雙葉郡界に屹立して本郡山根、瀧根の二村に跨り、海拔約一千百米阿武隈山脈中第一の雄峰、本郡内最高の秀嶽なる西南支脈中の北腹に巖窟あり、入口方四尺許、深さ五十九間許の横坑にして窟中濶さ二間許高さ七八尺の廣濶なる幾多の房室狀區劃ありて往昔夷酋の棲息せし所と傳へられてゐる、又此山及附近一帶の地より石灰石の產出が多い。



須賀川牡丹園　愛宕山公園　旭ヶ岡公園

岩瀬郡

安積郡の南方西白河郡との間に介在し、東は阿武隈河心を以て石川、田村の二郡に界し、西は中央山脈を境ひて、南會津郡に隣接し、地勢阿武隈河盆に屬する東部一帶の地は概ね平衍して鐵道及國道地を貫通し交通亦至便、東西十三里三町、南北三里二十七町、面積三十三方里五二六にして二町十二ヶ村より成り戸數九千三百七十、人口五萬五千百を有し、主要物產は米穀蠶繭、牛絲、馬匹、清酒、製麵陶磁及林產等にして將來益々發達の趨勢を有してゐる。

【須賀川町】 郡山市の南方約三里（鐵道七哩二）に在りて、郡の東部に位し、市街殷盛にして戸數三千百六十、人口一萬六千七百八十を有し、大正十五年六月までは岩瀬郡役所を設けられてあつた、其他地方專賣局出張所、縣立農學校、釀造試驗場、

警察署及土木監督所等の樞要機關を置かれてある、明治初年に於ける福島縣支廳亦此處に在つた、電氣事業は町營にして而も良好の成績を擧げつつある、而して市街の中樞地帶（通稱中町）は即ち文安、天正間に於ける郡主二階堂氏の城墟にして今尚其形迹を存じ町民亦其家臣の苗裔と稱する者多し、町の東方遙に阿武隈川を繞らし北に釋迦堂川を帶びてゐる。

【旭ケ岡公園】　須賀川町の市街より西南約八町なる通稱旭ヶ岡に在りて、老樹鬱蒼の間に一祠あり、前面に池ありて風致幽邃四時の遊覽に適してゐる。

【愛宕山】　須賀川町の市街より東北方に隆起せる丘陵中の秀峯にして頂上頗る眺望に富み殆ど全市街を俯瞰し得ると脚下に琵琶首池の滉洋碧翠を湛へて景趣を添へてゐる。

【牡丹園】　須賀川町の市街より東南約半里、縣道須賀川石川線に沿ひたる地に在り、柳沼氏の園藝地にして元祿年間の創設に係ると傳ふ、姚魏紫數千株を算し中には百數十年に及べる花株ありて四來の觀客を驚異せしめてゐる。

【岩瀬の森】　須賀川町大字森宿字中宿に在りて舊國道線の西に傍ふ、即ち村社鎌足神社の境域にして地勢隆起松杉蓊鬱、景致幽邃である、林中時に四葉の葛を出して土人に一の奇蹟視せられてゐる。

陸奥や岩瀬の森の茂る日に一聲くらき初時鳥　紀貫之

陸奥の安積のことを人問はどいかゝ岩瀬の森は答へむ　詠者不詳

【長沼町】　須賀川町の西方約九里に在りて縣道若松白河線に沿ひ、戸數五百八十一、人口三千九百四十七を有する名邑にして元祿十三年以來水戸の支藩松平氏（二萬石）の陣屋を置かれ明治維新後亦石岡藩支廳並に石岡縣出張所及第十二區會所等を置かれてあつた、此地古來陶磁器の產にして長沼燒と呼ばれてある、又街北に古城址あり、即ち文祿元年長沼隆時の築く所にして子孫七世之に居りしが天文年間會津蘆名の屬城と爲り後、蒲生上杉兩氏を經て加藤氏の會津を領するに及びて毀却せられ廢墟に歸したるものである。

【湯本溫泉】　郡の西南隅湯本村大字湯本に在る鹽類泉にして慢性諸症に效あるより遠近の浴客頗る多く、尙大字田良尾に野中溫泉と稱する硫黃泉ありて眼病に奇効ありと稱せられてゐる、而して郡內町村より此に到るには則ち朴坂峠の峻坂を踰えて所謂別乾坤に入り宛ら桃源に遊ぶの感がある。

【二股溫泉】　湯本村大字湯本地內の二股山の中腹に在る、斯布期性泉にして地僻に氣淸く景趣幽邃であるが爲夏季浴客が多い、而して二股山は卽ち鎌房火山群中の一乳房山にして南會津郡に跨り雨水の削剝作用に由り山頂分れて雙峰と爲つてゐる、標高千五百四十四米、殆ど全部より仰望せられ、又東麓の溪流を二股川と稱してゐる。

岩瀨なる二股山の白雲ほあなたこなたに立ちそわつらふ　詠者不詳

賤の女があつまからけの布衣二股川をさそわたるらむ　藤原信實

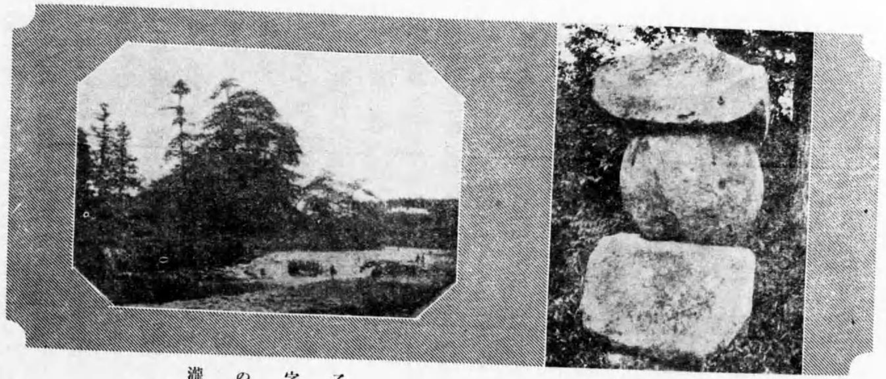
【縣社梓衝神社】　梓衝村大字梓衝に在り、景行天皇の朝、皇子日本武尊東征して此に來り執る所の比々羅木八廣矛を地に衝き樹てゝ天神地祇を祭る、因つて『ホコツキ』の地名起りたるもである、祭神は卽ち健御雷神及日本武尊にして延喜式內に列し、明治維新後更に鄕社を經て縣社に列せられた。

【二木の松】　大屋村大字大里にあり一名『武隈の松』とも云ふ、住古大職冠藤原鎌足公を訪ひ一首の和歌を詠せられ其の名大いに著はる。

石川郡

西は岩瀨、西白河の二郡に、南は東白川郡に隣り、東は石城郡に、北は田村郡に境し、廣袤東西五里十五町、南北七里十五町、面積二十三方里八七にして一町十四ヶ村より成りて、戶數七千四百七十、人口四萬六千四百を有す、物產としては米穀、蒟蒻、馬匹、煙草、蠶繭、織物及林產物等である。

【石川町】　須賀川町より東南約五里に在りて戶數九百五十、人口五千三百三十を有し、郡內の首邑にして大正十五年六月までは石川郡役所の所在地であつた



泉村五輪塔　　乙字の瀧

地勢四面丘巒を負ひ交通至便とは稱し難きも仍縣道の四通八達に加へ須賀川及白河方面には自動車の便あるより旅客の來往及貨物の集散等頗る多い、隨て市街殷賑、商業亦隆盛である、又此の地方より馬匹を產するを以て春季此に馬驟市を開帳し其數の多きこと縣下第一と稱せられてゐる、官衙學校としては警察署、私立石川中學校等あり。

【乙字の瀧】 本郡泉村大字龍崎と岩瀬郡濱田村大字前田川との間を貫流する阿武隈河中に在りて、縣道須賀川石川線の東に傍ふ、故に一名を石川瀧又龍崎瀧とも云ふてゐる、河水は急にして絶壁に懸り、屈曲高低斗絕して奔流激湍飛瀑を成し、幅約二百間高さ約二丈と稱せられ宛も乙字の狀を成してゐる。

【母畑鑛泉】 母畑村大字母畑に在りて、上の湯、下の湯の二ケ所に分れ、共に單純泉にして慢性諸症に奇効ありと稱せられてゐる。

【五輪塔】 泉村に在る、治承五年十一月、源基光の作にして、五輪塔としては本縣最古のものである。

西白河郡

本郡は本縣中部の南端に位し、南は栃木縣に境し、北は岩瀬郡に隣り、西は南會津郡に接し、東は石川郡及東白川郡に交界し、廣袤東西十里十八町、南北五里三十町、面積三十六方里零八二にして二町十七ケ村より成り、戶數一萬千八百十、人口六萬九千四百を有してゐ、地勢東部は概ね平坦にして農業に適し西部は山岳連亘起伏の間に廣漠たる原野の縱橫相連るを見る、而して主要物產としては米穀、蠶絲、清酒、馬匹、石材及び木炭等を擧ぐべく、染物亦『白河染』の名を以て聞えてゐる。

【白河町】 近世に於ける阿部氏（十萬石）の城邑にして福島市を距る二十一里（鐵道五十二哩三）東京を距る四十九里餘（鐵道上野より百十五哩七）海拔約三百六十米餘の高地に在り、戶數三千九百三十、人口二萬九十を有し、大正十五年六月までは西白河郡役所の所在地であつた、區裁判所（所屬刑務所支所共）警察署、土木監督所、縣立中學校及高等女學校等の樞要機關を置かれてある、市街殷賑、商業隆盛にして實に中部に於ける町邑中の第一位を占めてゐる、阿武隈川は蜿蜒として市街の北を流れ西には那須、甲子の連山起伏綿亘して波濤の如く南は八溝山の餘脈に蔽はれ東方は俗に五個村耕土と稱する平郊にして道路四通八達、西北は岩瀨郡長沼町及安積郡三代村等を經て若松市に通じ、東南は東白川郡棚倉町を經て常陸の久慈、多賀より水戶市に至るべく、又南方白坂寄居、蕭野を經て大田原に出づるもの是舊時の所謂奥州街道にして西南西郷村を經て豐原に出づるもの是現時の陸羽本街道である、鐵道東北線は市街の北部を貫通し私設白棚鐵道は街南を東南走して棚倉町に達し、尙石川町との交通に

は自動車の便がある、又春秋二季馬市を行つてゐる、其の出場馬數實に多數にして盛況本邦第一と稱せられてゐる。

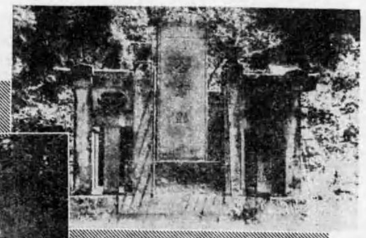
【白河城址】 白河町の北郊に在りて阿武隈川に臨み其碧流白砂を隔てゝ遙に那須嶽の雄姿を望む、又鐵道東北本線は其殘壘に沿ひ車窓より荒涼たる其牙城址の光景を望見すれば轉た懐古の情に堪へない、本城は興國正中の交結城主結城親朝が別館を此處に築き小峰城と號けて次子直朝に傳へたるものなるが、其裔孫義親の世に至り、天正十八年豐臣關白に沒收せられて蒲生氏に歸し、尋で寛永中丹羽氏に歸するに及んで更に之を修造擴張したりしものである、爾來榊原氏以下封を此地に受くる者數氏、慶應年間最後の城主阿部氏棚倉に移され、尋で一旦復封せしが幾くもなくして再び棚倉に移封せられ、又所謂戊辰の役、會津の兵此處に據りて抗戰數日、與奪數日、城終に陷りて市街亦兵燹に罹つた、明治九年六月十三日東巡の　東駕蹕を本町に駐めらるゝや、親しく此城址に登臨して里老に當年の戰況等を問はせたまひ尚附近所在の官軍墳墓に弔祭の　勅語金幣を頒ちたまひられた。

（歴代の城主中最も世に著れたる越中守兼左近衛權少將松平定信（號樂翁）の治世即ち天明三年より文化九年に至る三十年間にして、尚同家の白河を領せしは寛保元年より文政六年に至る八十三年間（四世）である。）

【南湖公園】 白河町の南十八町餘、小鹿山麓に在りて私設鐵道白棚線南湖驛に近接し、尚市内より亦自動車の便ありて交通自在である、而して南湖は一名關の湖と曰ひ、所謂十六景の在るありて最も風景に富むでゐる、湖水周廻一里餘中央に玉女島あり辨財天を祀る、又山に傍ひ湖に臨みて皆樂亭あり、關山前に當り松皐後を擁し頗る幽邃閑雅の仙境にして、加ふるに櫻花楓葉に其名を聞え湖の東岸に南湖開墾碑あり、一讀其經營の一端を知ることが出來る。

影うつる山もみとりの波はれて見渡しひろき關の湖　　關白近衛基前

山水の高き卑きもへだてなく共に樂しきまとゐすらしも　　少將松平定信



古關蹟　南湖公園　軍馬補充部白河支部

【宗祇戻の碑】 文政中建つる所にして白河町字櫻町に在り、文明中詞人白河城東の鹿島祠に會集して連歌一萬句を作つた、時の詞伯宗祇之を聞き遙に會せんとして來た、途に一女子の綿を持する者に逢ふた、宗祇之を見て『其綿沽るか』と問ふや女子輒ち

阿武隈の川瀨に棲める魚にこそうるかといへる綿はありけれ

の一首を賦して之に答へた、宗祇畏れて謂へらく婦女且然り、白河の詞藻當るべからずと乃ち筵に臨まずして還りしと傳へられてゐる。

【白河古關蹟】 古來奥羽三關の一として有名なりし白河古關蹟は郡の南端白河町より南三里古關村字旗宿に在り、能因法師の

都をは霞と共に立ちしかど
秋風そ吹く白河の關

及梶原景季の

秋風に草木の露を拂ほせて
君かこゆれは關守もなし

の詠歌に因つて夙に世人に喧傳せられてゐる、山來此地は往古の奥州街道に當り陸奥に入るの咽喉にして、宇都宮より板戸、鹿子畑、黑羽、蓑澤等の小驛次を經て此關門に至りしが爲、後世の奥羽街道に對して之を關街道と稱したのである。而して旗宿は關山高く峨々として聳え、頂上に古梵刹ありて關山滿願寺と曰ふ、又白川と稱する一溪流あり、源を旗宿の南方里餘の地に發し北流して古關蹟の下を過ぐ（白河の地名亦是より起ると傳へらる）其河畔に所謂九重楓あり、三秋千葉霜に飽きて二月の花よりも紅なるの時、潺湲たる白川の清流に映じて隨波逐浪する處宛ら錦繍を晒すが如く見ゆ、近年此景を採り紗等に正葉摺と爲して一の土産とした、又路傍に天太玉命外二神を祀れる村社白河神社あり、即ち關守の内館址にして湮沒久しく其處を知られざりしが、寛政中白河侯定信地理を考へ諸書を參照して、始めて此地が其遺址たることを確め碑を建て、之を標したのである。

【感忠銘】　白河町を東南に距る里許、縣道白河棚倉線に沿へる大沼村大字大字搦山に結城氏の古墟あり、南朝の忠臣上野介宗廣父子の居城址にして陸奥太守義良親王、鎭守大將軍北畠顯家及弟顯信等も亦暫く逗まりし處にして當時の所謂白河城である、永祿中同族小峰氏の陷るゝ所と爲りしより廢墟に歸した、白河侯定信夙に宗廣、親光の忠烈を感賞し文化中『感忠銘』の三大字を書して結城氏の舊臣内山重濃に與へた、重濃乃ち貲を捐て工を起して藩儒廣瀨典の撰文銘辭と共に之を古墟の石壁に刻した、其銘辭に曰く

嗚乎此山。維石巉々。溪風肅然。劍佩夜還。蹤跡不刊。輝　年。

民莫自棄。國能生賢。

即ち所謂磨崖の碑にして高さ二丈餘、濶さ一丈許蓋し全國有數の巨碑である。

【矢吹町】　白河町の北方三里（鐵道九哩三）に在りて國道及び鐵道に沿ふ、戸數六百六十、人口三千五百二十を有し、郡内の名邑にして警察署あり。

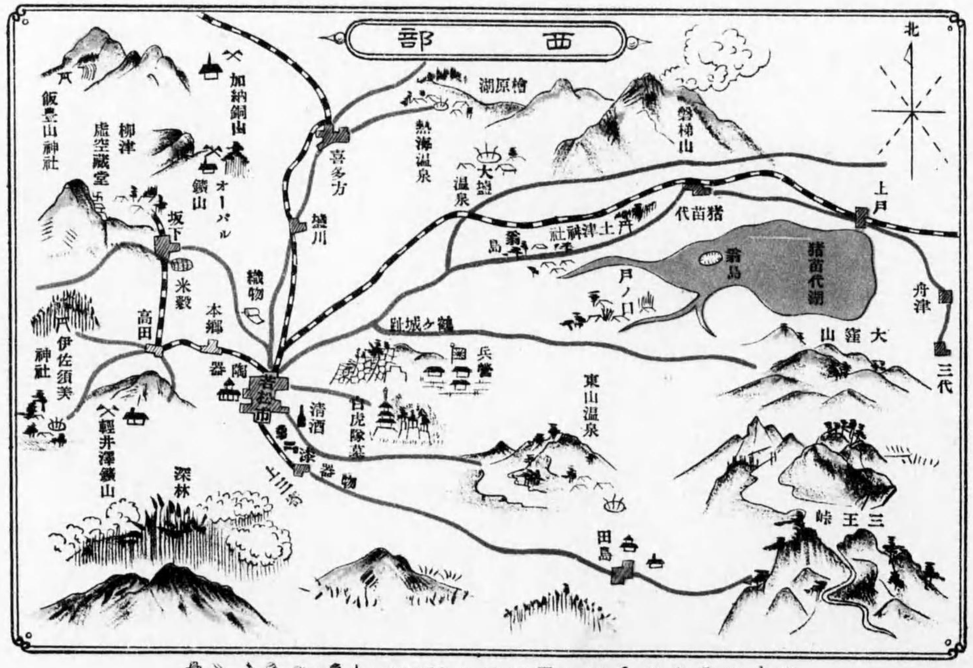
【甲子温泉】　白河町より西方五里餘、西郷村大字鶴生の山間、阿武隈川の上流に在りて眺望佳絶である、又附近甲子山中の勝景大熊瀧、雄瀧及雌瀧等は實に壯觀を極め且其甲子山の景色は三秋紅葉の時節が第一である、白河侯樂翁が其著『關の秋風』の中に『白河に至りて甲子の山見ざらんは孔子の門を過ぎて入らざるが如く甲子の山に至りて楓葉の景色見ざらんは堂に升りて宝に入らざるが如し』と激賞せられしに徴するも、其絶景なること想ふべきである。

【樂翁溪】　西郷村大字鶴生の西北千歳川の上流に在り、字孫畑より山逕を辿れば則ち左右岩石屹立し、斷崖絶壁宛ら神斧鬼鉞の削れるが如く、奇形怪狀變化極まりなく、實に天下の奇勝である、加ふるに滿山躑躅繁生し、春花秋葉妍を競ひ麗を鬪はして宛ら錦繍を曝すに似てゐる、文化中白河侯定信致仕後廉々此に遊び其著『退閑雜記』中に之れが鍾愛の意を表示せしより、後人之を『樂翁溪』と呼んだのである。

東白川郡

本郡は西白河郡の東南に在りて、北に石川郡を控へ、東石城郡と相隣り、南茨城縣と境する處、西偏に八溝山脈連亘して自ら分界するを見る、地勢東部の一帶には阿武隈山脈連亘起伏すれども久慈川北より流れて平野南に開け、氣候亦一般に温和にして概ね農科に適してゐる、廣袤東西八里十三町、南北七里二十四町、面積五十方里六七一にして一町十二ヶ村より成り、戸數八千百八十、人口四萬九千三百四十を有す、物産は米穀、蒟蒻、葉煙草、馬匹、蠶繭、清酒及林産物等にして就中木炭の製造は最も發達してゐる。

【棚倉町】　白河町を距る東南五里、郡の西北部に在りて往時は白河結城氏の屬領なりしが、慶長十五年立花宗茂の采邑と爲り、元和六年其轉封と共に丹羽長重之に代りて寛永元年築城を經治したが未だ成るに及ばずして白河に轉封せられた、内藤信照其後を襲ひ尋で太田、松平（右近將監）小笠原、井上、松平（周防守）及阿部等の諸氏を歴て明治維新の際に及んだのである、今戸數九百十



社神別古々都(倉棚)

稲荷神社の杉

社神別古々都(八槻)

人口四千八百八十を有し、大正十五年六月までは東白川郡役所の所在地であつた、本町には縣立農蠶學校及警察署等在りて一郡の首邑を成し、尙目下工事なる鐵道大郡線の要衝に當りて將來の發展を期待しつゝある。

【國幣中社都々古別神社】 棚倉町字馬場及近津村大字八槻の兩所に在りて共に味耜高彦根命を祀り、日本武尊を配す、而して棚倉町の社には日本武尊の御物なりしと傳ふる鎧及源將軍頼義父子の奉納と稱する長覆輪の太刀二口（共に國寶）其の他の寶物を藏し、近津村の社にも亦源義家の奉納と稱する古太刀其他の寶物を藏せられてゐる。

【矢祭山八景】 棚倉町を距る南方六里餘、高城村大字内川久慈川の上流に在り、故に一名久慈八景とも稱してゐる、常陸の大子町より棚倉町に通ずる要路に當りて車馬の便あり、山には奇岩怪石磊々落々として起伏磐桓

し、尙傍に村社矢祭神社あり大日靈貴尊、伊邪那美尊及少彦名命を祀り、天喜二年二月十五日源義家の勸請する所にして所謂血祭の矢を奉納せしより、矢祭の名起りたものであると傳へられてゐる。

【稻荷神社の杉】 高城村大字關岡稻荷神社の境內に在り、根元の周圍五十六尺四寸、樹高百尺あり、天然記念物に指定せられた。

西部

若松市

明治三十二年四月市制施行までは即ち北會津郡の首邑であつた。地は同郡の西北部に位し、東に慶山、羽黑山及背炙嶺等の諸山を控へ、西南黑川（一名湯川）の峽流を繞らし、東北は瀧澤嶺を隔て、磐梯山高く雲表に聳えてる。又西北は廣濶なる沃野に連りて遙に飯豐、大日等の諸山が見ゆる。元中元年佐原義連の苗裔蘆名直盛初めて館を此處に築き、館下の川名に因みて之を黑川城と號けたりしが、天正十八年蒲生氏鄕の封を此に受くるに及びて之を若松城と改稱したるものである。然れども以前にも仍若松と稱せしことあるが如き記錄存せしと云ふてゐる。爾來上杉加藤の兩氏更に此に據り、蒲生氏亦兩氏の間に再封せられて雄を東北の野に張り、尋で寛永年間將軍家光の異母弟保科正之羽州山形より轉封以來、世々二十餘萬石を領して久しく諸侯の間に重きを爲したりしが、明治維新の際偶々方鵠を誤りて王師に抗せし爲、所謂玉石俱に焚かれて今尙舊觀に復し得ざるの狀態に在り。

偶成　　若松縣令　澤　簡德

奈此戰餘殘弊何。看來一夜鬢將皤。無情窓外蕭々雨。偏向芭蕉葉上多

而して鐵道磐越西線會津若松停車場は即ち市北の北會津郡町北村地內に在りて南方直に市の大町に接續し、會津線西若松停車場亦市の西南門田村界に在りて

漆器製造

公會堂

舊城趾

指顧の間に相望む。隨て旅客の來往、貸物の集散極めて多く、其の殷盛實に縣西部に冠を爲してる、地は東西三十二町、南北二十五町、面積零方里八一〇にして戸數七千八百六十人口四萬六千二百七十を有し、福島市を凌きて郡山市と相伯仲す、又市役所々在の大町は市中繁華の中樞にして大賈巨商連擔列肆し、南に隣れる桑町亦區裁判所以下の諸官衙、學校及會社等の所在地にして其の繁華之に亞ぐ、此他尙七日町、融通寺町、川原町及材木町等市の中心には遠近あるも亦繁華の地たるを失はず、由來此地方は第一に交通の不便を憾みたりしが近年鐵道の開通に依りて之を免れ、加ふるに明治三十四年會津電力株式會社の設立に依りて所謂不夜城たるを得るに至つたのである。然れども所謂會津盆地の間に在りて地域に限あるより市民は主として製造工業に依りて立たんことを

期し、今や東北第一の工業地と稱せらるゝに至つた。即ち所謂會津漆器を首めとし人參、清酒、綿織物袋織物、木工品、金屬器、蠟燭及油類等皆世に有名なるものてある。

【鶴ケ城址】 城址は市の南端黑川に臨める處に在りて隍壘樹石尙存し、轉た往日の壯觀を偲ばしむるものがある。

懷古　　奥平謙輔

深樹梟鳴夜欲闌。葉城無處不凋殘。繁霜候月天如水。原野寥々白骨寒

現今は市民の遊覽地として逍遙散策に供せられてゐる。

【御藥園】 字徒之町の東端に在り、即ち舊藩主の別邸にして構內情趣幽閑、泉石の布置、樹竹の安排亦其妙を盡してる。

【步兵第二十九聯隊】 鶴ケ城址の東北方なる一廓內の廠舍即ち是にして練兵場は舊城址元三の丸に屬し、孰れも若松藩士の故宅址である處、大正十四年五月軍制改革の結果之を廢して更に仙臺に在りし本聯隊を移轉したのである。

【蒲生氏鄕の墓】 字榮町、臨濟宗興德寺內に在り、墓標は即ち五輪塔にして高さ九尺、面に地水火風空の五字を刻してある。由來氏鄕は文祿四年二月七日大阪參覲中に薨じて洛北紫野の大德寺に葬られた。此墓は嗣子秀行が其遺骨を分葬したものであると云つてゐる。

謁會津參議公廟　　蒲生君平

廟古悲風對落暉。白楊蕭索葉初飛。山川顧望先封地。淚下關東一布衣

又興德寺は弘安中宋僧大圓禪師の開基にして應永年間本朝十刹の一に列せらる天正十八年豊臣關白の東下するや亦之を行館に充てたりしと傳へてゐる。

【縣社靈養國神社】 會津若松停車場の東方約五町、字靈養町に在りて保食神外三座を祀る。社は即ち弘仁二年間の創建に係り延喜式神名帳に列してる。祠宇は森々たる古松老杉の間に甍を列ね境內亦極めて蓬嚴である。

重なる官公署學校會社等左の如し。

警察署、郵便局、福島縣會津高等女學校、福島縣工業學校、土木監督所、福島縣會津中學校、市立圖書館、鹽專取締場支所、市立公會堂、市立物產陳列所、會津銀行

尙本市は勿論會津方部一般に民謠『會津大津繪』なるものが唄はれてゐる。

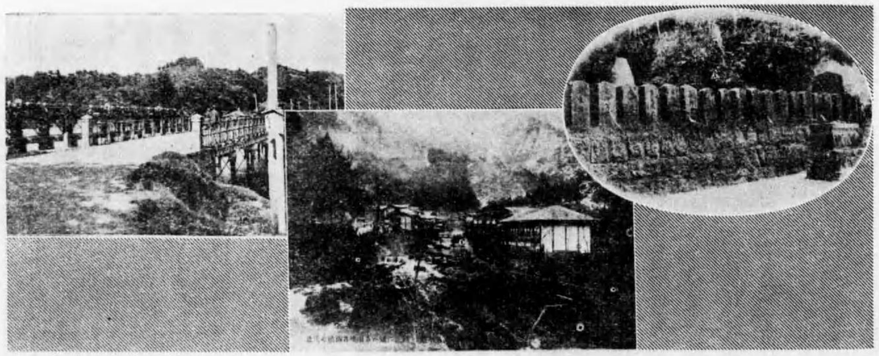
頃ば戊辰の朝またき　二十三日の暁いに、已むなくしりぞく瀧澤の、飯盛山にと、よじ登る、ひそかに見おろす鶴ヶ城、早これまでと十九人、いさぎよく血しほに染し、紅葉葉の、赤き心に忍ぶれど、そでに露散る白虎隊

北會津郡

本郡は所謂會津地盆地の中樞若松市を包擁して市外の十一ヶ村を境域と爲し東は猪苗代湖に瀕し、北は耶麻郡に隣り、西は河沼、大沼兩郡と交界し、南は南會津郡に、東南は岩瀨、安積の二郡に接境してゐる、廣袤東西四里五町、南北六里九町、面積二十方里九二一にして戸數五千九百七十、人口三萬六千七百十を有し、舊郡役所は之を若松市内に置かれてあつた、地勢西北一帶の地は平衍にして所謂會津平野に相連れるも猪苗代湖及安積、岩瀨の郡界に至るに隨ひ漸く高原を成して中央山脈に連接してゐる、又主要物產は米穀、人參及陶磁器等である。

【東山溫泉】　會津若松停車場より一里弱、若松市の東端より約半里なる東山村大字湯本に在りて一聚落を成してゐる、溫泉は今日洗湯（華氏百十二度）漣湯（同百三十四度）瀧湯（同百二十度）狐湯（同八十度）の四泉を主とし共に鹽類性泉に屬し、地勢群巒攢蹙、一水東より來りて其間を奔流し、岸に觸れ石に激して聲を作し、沫を飛ばす處、層樓高閣崖に倚り溪に沈む、景致洵に愛すべきものである、由來會津の地、山水秀麗にして名所舊蹟觀るべきもの洵に多い、就中山水の雙美と客舍の完備してゐる所は即ち東山である、古來俗謠として

出羽で庄内最上で上の山此處は會津の東山



白虎隊士の墓　東山溫泉　戸ノ口十六橋

と云へるは敢て誇張してゐるものにあらざるを知る、此地居民八十戸（全村總戸數三百、人口二千百九十）多くは旅旗亭を本業とし每戸浴槽を設けて遊浴の客を迎へてゐる。

【東山の名勝】　東山を貫流する湯川（一名黑川）は溪谷の間に發源し、兩崖奇岩怪石相迫る處に幾多の名勝瀑布ありて、其主なるものは伏見瀧、雨降瀧、傘岩金壺瀧及屏風岩等である、而して伏見瀧は湯川の下流に在りて會津電力株式會社の發電所と相對し雨降瀧は東山溫泉場より湯川を溯ること八町の處に在りて右に傘岩屹立し、兩者相對して頗る壯觀を極めてゐる、此他尙幾多の奇勝、飛泉ありて其風景亦賞すべきもの少なくない。

【白虎隊の墓】　若松市の東方二十町許、一筑村飯盛山腹に在り明治戊辰の役、所謂白虎隊の十有九士が、春尙淺き青衿の身を以て孤軍奮鬪刀折れ矢盡きて國

難に殉じたる遺骸を斂葬したる所にして、若松市は一畔の中に在り、而して當年の白虎隊士は此より遙に城中の烟焔を望見して以て城已に陷ると速了し乃ち城に向つて再拜して曰く『臣事畢れり』と各稱刺して自刄したのである、時恰も八月二十三日である、墓側に石碑ありて當時の事を錄してある、一讀愴然暗涙に堪ばざるを得ない、先年遠く伊國首相の聞に達し豐碑を寄贈せられた。

【螺螺堂】　飯盛山腰白虎隊士の塋域下に在りて傍なる小社宗像神社に屬し、本名を圓通堂と曰ふ、寛政年間の建立にして其構造六稜二層高さ五十尺餘、旋回して昇降すべく其狀宛も螺殼に似てゐる、堂内に本尊阿彌陀佛及三十三觀音の像を安置し、昇降其の階梯を異にしてゐ、又西側に宇賀神社ありて祠内に戊辰役の犧牲者菅野權兵衛（會津藩老）及白虎隊士の木像を安置してある。

【院内松平家の廟】　東山、一箕兩村の境界なる羽黑山腹に在りて明暦以來歴世の墓廟を列してゐる、此地もと羽黑權現の別當東光寺の院内なりしより『院内』の名起つたと云つてゐる。

【石部櫻】　一箕村瀧澤部落の北方なる田畔に在り即ち石部刑部なる者の遺愛樹であると傳へてゐる、天明中會津藩主柵を繞らし制札を建て、保護を加へた、故に今尚存在し花時杖を曳く者が多い（樹齢無慮五百年以上、高さ三丈餘。枝葉庇ふ所約二十間許）又飯盛山誌にも『太夫櫻』と稱する老樹ありて寛永中横死せし妓女某の墓木なりと傳へ、文化中碑を建て其由來を識した。

【蘆の牧温泉】　若松市を距る南方四里。縣道若松宇都宮線に沿へる大戸村大字蘆の牧に在りて大川の岸に緣る、即ち巍峨たる岩石、鬱蒼たる森林背景を爲し天然の風致眺望佳絶である、泉質は弱鹽類泉に屬し、自然に砂石を掘りたる處より湧出して、原始的の趣致を具へ、尚ほ諸症に奇効あるより四時浴客絶えない。

塔の岡

田島町全景

南會津郡

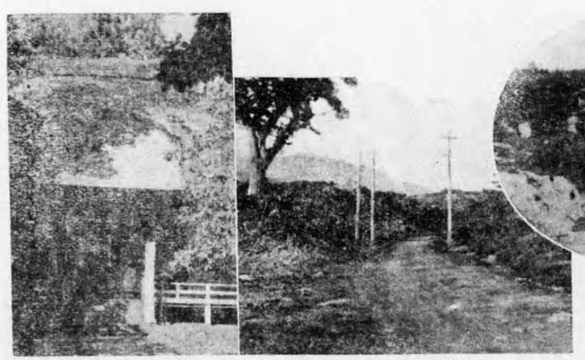
本郡は北會津郡及大沼郡の南方に在りて縣の西南端に位し、東は岩瀬、西白河の二郡に、西は新潟縣に、南は群馬、栃木の兩縣に接界し、尚西南の一角は即ち檜枝岐の高原を通過せる縣道若松沼田線に由りて群馬縣下に通じ、地勢四面皆山嶽に圍繞せられあるより土地一體に高原にして、唯西部の只見川沿岸地帶に些少の平坦部あるを見るのみ、廣袤東西十六里二十二町、南北十二里十八町、面積百四十八方里二六二にして一町十七ケ村より成り、其面積の廣大は實に縣下各郡に冠絶するのみならず、又香川縣の全面と殆ど相匹敵するも戸口未だ稀薄にして僅に六千三百三十戸（一方里平均四十四戸强）四萬百五十人（一方里平均二百七十四人强）を有するに過ぎない、而も地味は敢て肥沃ならざるにあらざるも唯

地僻遠に交通不便にして文化の普及發達遲々たるに由れるのみ、殊に森林の如き、鑛床の如き、所謂原始狀態の儘到る處に存在して甚だ豐富である、共に將來最も注目に値する所である、又物產の主要なるものは即ち米穀、人參、大麻蠶絲、葉煙草及林產物等にして、殊に大麻は多く越後地方に販出し、所謂越後縮の原料に供せられてゐる。

【田島町】　郡の東部に在りて縣道若松宇都宮線に沿ひ、尙同線に由り大川流域を傳へて北行、若松市に通じてる（里程約十二里）戶數九百四十、人口五千二百七十、郡內第一の大邑にして南會津支廳、警察署及土木監督所等の所在地である、尙舊南會津郡役所亦此處に在つた、（明治維新前に於ける幕領地支配の田島陣屋亦復然り）而して右縣道は此より南走して栃木縣上都賀郡今市町に至り所謂日光街道に聯絡して更に宇都宮市に達するのである。

【塔の岳】　田島町の北方六里餘、大川の沿岸旭田村大字澳田より二川村大字白岩に通ずる處に在り、奇岩怪石相駢び紫藤綠蘿之を點綴し、紅白の躑躅滿山を彩りて之を相映發するの日は其の美觀實に言ふべからず、加ふるに山水亦明媚にして實に本郡の勝境である、又川に沿ひて下ること二十町許にして湯の上溫泉あり、尙約一里半にして北會津郡大戶村なる大川橋に達すべし、橋下奔流岸に觸れ石に激し亦頗る壯觀である、其下流約十五町、深淵を挾んで蘆の牧溫泉（北會津郡）及小谷溫泉（大沼郡）あり、其景宛も南宗畫帖を展ぶるが如しである

【尾瀨沼】　檜枝岐村（田島町より十七里）の西南三里、上野國境に在りて縣道若松沼田線に沿ふ、周廻三里、四面山を環らし、一泓鏡を開く、縣下第一の高峰燧ヶ嶽（海拔二千三百四十六米）は其北岸に屹立して、湖上に其倒影を蘸す風光亦愛すべきである、故に每歲避暑又は探勝を目的として都人士の來遊する者が多い、又內地唯一のナガハモウセンゴケの自生地にして天然記念物として保存を要する植物學上の重要地である。



立木觀音

一里塚

柳津虛空藏

河沼郡

本郡は北方耶麻郡と南方大沼郡及北會津郡との間に在りて、西は新潟縣に界し、東は日橋川の左岸に沿ひて狹く、猪苗代湖岸に接し、東西九里十八町、南北四里五町、面積二十六方里六六五にして二町二十二ヶ村より成り、戶數八千三百六十、人口五萬二千八百二十を有す、地勢坂下町附近一帶の地は平坦にして沃野相連れるも西部は概ね山嶽起伏して平野を見ること甚だ稀である、又主要物產は米穀、人參、淸酒、綿織物、蠶繭及葉煙草等にして外に和紙及藍の特產地である。

【坂下町】　郡の東部に位して若松市を東南三里餘に望む、戶數一千百十、人口五千七百十、縣立農林學校、農事試驗場分場及警察署等の所在地にして尙大正十五年六月までは河沼郡役所の所在地であつた、東に宮川を帶

び西に高寺、東松の諸村を控へ人煙稠密交通至便である。

【野澤町】　坂下町の西方約五里に在りて戸數七百、人口四千百七十を有し、坂下町に次げる名邑なると鐵道磐越西線の樞要驛なるとに由りて其名を知られてゐる。

【柳津虚空藏堂】　柳津村大字柳津地内只見川の沿岸に在りて臨濟宗圓藏寺の管理に屬してゐる、大國中空海上人（即ち弘法大師）手刻の靈像を法弟德一（按ずるに德一は法相宗の僧にして空海は眞言宗の祖なれば之を法師弟と稱すること不審）に付屬して之を創建せしむと傳へ、又天正以來二百石の璽田を有し歷代の領主皆堂塔伽藍を修造し、且多く燈油の資を寄せられしと云つてゐる、明治二十年内務省より特に保存金を交付せられ維持法亦確實である、而して堂宇は菊充堂と稱し、中古以來屢々回祿に罹りし爲現在のものは即ち文政年間の建築に係り、其宏麗、僻地に於ては多く見ざる所に屬し其境域の絶景と共に嘖々世上に喧傳せられてゐる、又本村は會津線の終點に當つてゐる。

【立木觀音】　坂下町の西北、八幡村大字塔寺の惠隆寺境内に在りて所謂會津三十三禮所の一に列してゐる、其詠歌に曰く

はる〳〵と參りて拜む惠隆寺いつも絶えせぬ松風の音

と亦大同年間空海上人の勸進に因り、坂上田村麿の創建せる所にして昔時は此を距る西方一里許なる高寺村に在りしを、建久年間現在の地に移したるものである、堂宇宏壯にして空海の作と稱する千手觀音の立像（長二丈八尺）を安置し、堂宇亦建久年間移轉當時の建築である、明治四十年佛像と共に國寶及特別保護建造物に指定せられた。

【會津中央藥師堂】　勝常村大字勝常なる眞言宗勝常寺の本堂即ち是にして、明治三十六年本尊及脇侍佛像と共に國寶及特別保護建造物に指定せられた、大同二年空海上人の錫を會津に駐むるや、己に五軀の藥師像を刻みて未だ安置の地をトせず、之を法弟德一に屬して還京した、德一乃ち元寺、漆、堤澤字内及勝常の五所に分置したのである、本堂は即ち其一にして且其の中央に位するより此名がある、藥師佛の身長七尺製作優秀、古色蒼然堂宇亦足利氏中世の建築に係り、結構壯麗、共に世上稀に見る所のものである、又境内に觀音堂ありて身長六尺七寸の十一面觀音像を安置し、其製作優秀の故を以て藥師佛と同時に國寶の指定を受けた、又會津三十三禮所の一に列し、左の詠歌を傳へてゐる。

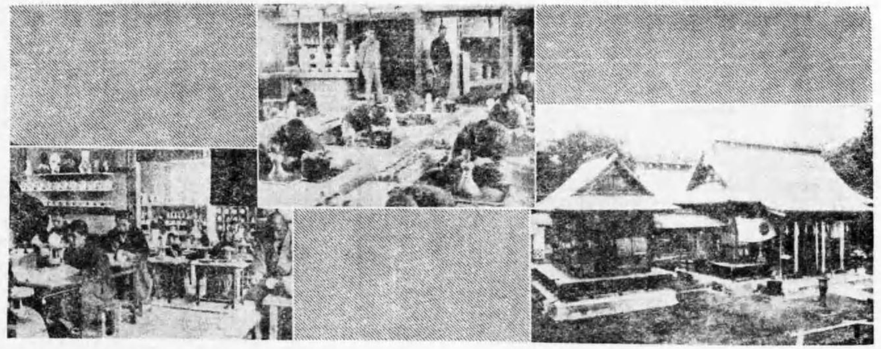
幾度もあゆみをはこぶ勝常寺生れ會津の中の御ほとけ

【藤倉二階堂】　日橋村大字倉橋字藤倉に在りて所謂二階建に似たる構造（即ち二層軒）なるより此名がある、明治三十六年特別保護建造物に指定せられ、堂内には春日の作と傳ふる身長八寸の地藏佛像を安置されてある。

【八葉寺阿彌陀堂】　堂島村大字廣野字冬木澤に在り、相傳ふ康保元年空也上人八葉寺を建立して境内に阿彌陀堂を建つと（八葉樹は今眞言宗に屬す）而して會津地方にては之を『會津の高野』と稱し、毎年陰歷七月朔日より十日まで、其年所謂新盆に逢ふべき死者の冥福を祈るが爲に家族親戚集つて參詣し、其數無慮數萬を算す、堂宇は明治三十七年特別保護建造物に指定せられ、又傍に空也上人の墓及觀應四年建設の古碑がある（按ずるに觀應は即ち北朝の元號にして其三年に文和と改元せられたれば、即ち當に文和二年と記すべに仍舊に依つて年次を記す其當時に於ける都鄙文野懸隔の狀以て想ふべきなり）

【經社心清水八幡神社】　八幡村大字塔寺に在りて一に塔寺八幡とも呼ばる、天喜年間源鎭將頼義が山城石清水八幡宮の分靈を勸請すと傳へ、應神、仲哀、仁德の三帝及神功皇后を合祀す、中世以來歷代藩主の崇敬を受け、殊に保科氏の就封に及んで三十石の祀田を寄せられた、社に『長帳』と稱する古記鈔を藏してゐる。

【大山祇神社】　野澤町大字正中字大久保に在りて大山祇命を祀る、社格は尙村社なれども鎭座極めて古く、靈驗亦甚だ顯著なりとて遠近より賽者多く、其數毎歲數十萬を算すと云ふ、境内幽邃、社殿亦壯麗である。



伊佐須美神社

陶器製造

【一里塚】　日橋川の南岸越後街道に殘存し、江戸時代の記念的遺蹟である。

大沼郡

本郡は北會津郡の西方に位し北に河沼郡、南に南會津郡を控へ、西北の一角新潟縣に接し、地勢東方の一部は概ね平坦にして沃野あり。他は之に反して山嶽起伏、交通亦不便である。廣袤東西十二里二十六町、南北八里二十五町、面積六十二方里三九九にして、二町二十一ヶ村より成り、戸數七千六百七十、人口四萬八千六百三十を有す、物産の主なるものは米穀、陶磁器人參、楮皮、漆液、生蠟、木材大麻、苧麻、紫蕨及炭酸水等にして此中陶磁器は本郷町より産出し人參は各地に産して支那、朝鮮に輸出せられ、漆液は會津漆器の原料に供せられてゐる。又炭酸水は即ち萬歳炭酸水と稱し、桐材は所謂會津桐の本場として夙に名聲を博してゐる。

【高田町】　若松市の西方約三里に在りて郡の東偏に位し、宮川の上流に臨む、戸數八百七十、人口四千四百四十を有し、郡中の首邑にして大正十五年六月までは大沼郡役所の所在地であつた。而して從來は若松市に出でずんば、則ち鐵道を利用すること能はざりしが、大正十五年十月會津線の開通に方りて町内に停車場を置かれたるより、交通上多大の便を加ふるに至つた。又警察署を置かれてある。

【國幣中社伊佐須美神社】　有名なる古社にして高田町に鎮座し、伊弉諾伊弉册二尊を祀る。延喜式名神大社に列し、貞觀格式、正一位の條下に載せられ明治六年國幣中社に列せられた。往昔崇神天皇の朝、四道將軍派遣の時、大彦命其子武停川別命と相津にて邂逅せられたのは即ち此地にして神社亦其の遺跡であると傳へ、又最初西南方の明神ヶ嶽に在りしを、此に遷座したるものなりとも云つてゐる。境内に薄墨櫻あり即ち花色の淡墨櫻に似たるより名づけられたのである。

【沼澤沼】　高田町の西方約十里、只見川沿岸、沼澤村大字沼澤に在り、水面海拔五百米餘、東西二十六町、南北三十町、周廻二里二十七町、水清く秋深く風景の佳美を以て名あり。而して此沼に放流せる鱒の人工孵化は頗る有望にして最初本縣水産試驗場に於て米國産紅鱒の放養を試み、尋で十和田湖産のもの數萬粒を放養したりしが、其後所在沼澤部落に於て養魚組合を組織し、民業として之を經營しつゝあるが、天産の餌亦肥大にして世人に賞味せられてゐる。

【本郷町】　高田町の東南一里餘に在りて北會津郡川南村に隣接し、赤鐵道會津線の停車場を置かる、戸數五百九十、人口二千九百五十を有する一小邑に過ぎざれども、古來陶磁器の製造を以て著れ、所謂本郷焼又は會津焼の名を以て廣く販賣せられてゐるのである。

耶麻郡

所謂會津五郡の北端に在りて南は河沼、北會津の二郡及猪苗代湖心を境ひて安積郡に接し、東は信夫、安達の二郡に、北は山形縣に、西は新潟縣に交界し廣袤東西十四里三町、南北六里二十五町、面積八十方里〇五五にして三町三十三ケ村より成り、戸數一萬四千七百八十、人口九萬二千六百四十を有す、地勢喜多方町附近の中央地帶は概ね平坦にして交通至便なるに加へ、鐵道磐越西線の其間を貫通するありて大に各種産業の發達を促進しつゝあり、而して主要物産は米穀、蠶絲、漆器、清酒、林産物及鑛産物（硫黄）等にして就中硫黄は本郡の特産に屬してゐる。

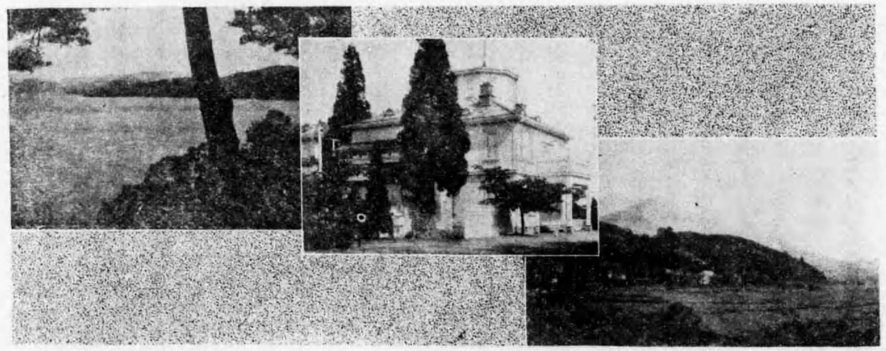
【喜多方町】 若松市の北方四里に在りて戸數二千三百四十、人口一萬二千三百六十を有し、會津盆地中若松市に次げる繁華の市街地である、故に縣立中學校縣立高等女學校、警察署及土木監督所等の樞要機關は皆此處に置かれてある、尚大正十五年六月までは耶麻郡役所の所在地であつた、而して若松市よりは所謂米澤街道に由り鹽川町より岐れて此處に通ずべく、又鐵道磐越西線は若松市北より北折して此處を通過し、更に西北進して新潟に向ふ等交通の利便は自ら此處をして物貨集散の地たらしめてゐるのである、加ふるに機械製絲業盛んにして且つ漆器業亦若松市に次ぐの盛況を見てゐる、若夫れ熱鹽温泉場及米澤市に通ずべき鐵道（既定計畫線）開通の曉に於ては町勢尚發展すべきこと敢て言を俟ざる所である。

【熱鹽温泉】 喜多方の北方、押切川沿革の縣道喜多方熱鹽線を辿ること二里半なる熱鹽村大字熱鹽に在りて鹽類泉に屬し、其源泉は豆腐製造資料の鹵汁に代用せられてゐる、往古此地に鹽井ありて食鹽を産せしが慶長十六年の激震に因りて埋沒し去れりと云ふ、地高燥幽邃、山水亦明媚にして好個の小仙寰なりしが大正九年の火災後、浴場を押切河畔に移轉し、且各種の設備に一大改革を加へて以て新生面を開いた、又此地は明治の慈善家瓜生岩子の桑梓にして、名刹示現寺の境内に其墳墓を置いてある、而して示現寺は所謂殺生石靈の濟度を以て有名なる源翁和尚の開基（或云中興）にして護法山と號し今尚和尚の遺物と稱する器什を藏して觀覽に供してゐる、加ふるに堂塔完備、香積富饒、實に地方稀有の巨藍を爲してゐる（温泉亦此寺の所有に屬す）境内に觀音堂あり亦會津三十三禮所の一に列し左の詠歌を傳へてゐる

極樂に導きたまへ觀世音慈悲あつしほに參る身なれば

又附近の日中部落には日中温泉大鹽村には大鹽温泉ありて共に鹽類泉に屬してゐる。

【北山藥師堂】 喜多方町の東方里許、北山村大字漆に在りて村後の丘陵上に倚る、故に一名『漆の藥師』又『峰の藥師』と呼ばれてゐる、即ち五藥師の一にして亦世人に篤信せられて



磐梯山　高松宮殿下御別邸　猪苗代湖

ゐる。

【縣社飯豐山神社】 飯豐山は郡の西北端、山形縣と新潟縣との境界に在りて一ノ木村に屬し方約十里に蹈躍してる、海拔二千百五米、山上四時白雪絶えない且夏秋の交、登山する者目に櫻花を見、耳に杜鵑を聞き、足に黄葉を踏む等所謂四時の風物一時の觀感に上るより一に『四季の山』とも呼んでゐる、山頂に飯豐神社あり、所謂五王子及御井神外四座を祀る、古來稼穡の守護神なりと稱し、早種新穀の賽饌を齎らして四方より來り詣ずる者多い。

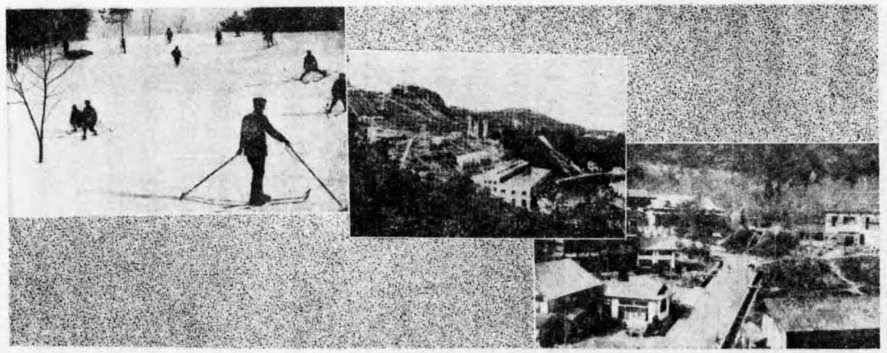
【猪苗代町】 郡の東南部に位し、南に大湖を控へ、西北に磐梯山を負ひ、東方長瀬川に臨み、戸數六百二十、人口三千五百九十を有する一驛次にして鐵道磐越西線は町の南方を通過し、縣道亦中央を貫通するを以て交通至便である、而して町内には警察署及地方測候所支所あり、又附近吾妻村及翁島村には溫泉の湧出あり。

【高松宮御別邸】 翁島村大字翁澤の猪苗代湖畔に在り、風光明媚、大氣清澄、盛夏の候と雖も尚暑熱を知らず實に避暑養眞の理想鄕である。

【縣社土津神社】 猪苗代町北方、磐保村地内見禰山と稱する丘上に在りて會津松平藩祖保科正之の靈を祀る、祠前に巨碑あり、四面に碩儒山崎闇齋撰む所の文を刻む、又社北に正之の墓碑あり高さ一丈二尺、表面に『土津神墳鎭石』と題してある。

【縣社磐椅神社】 磐瀬村に在りて大山祇命外三座を祀り、前記土津神社と東西相並ぶ、即ち延喜式内の古社にして境内幽邃、社殿宏壯、頗る森嚴の觀あり、而して土津神社の祭神たる保科正之は即ち當社の末社たらんことを希望して生前に其地を卜定したりしものである。

【猪苗代湖】 湖は安積耶麻及北會津の三郡に亘り、湖心を以て其境界を劃するものにして湖名の起源は即ち本郡猪苗の地名に存ずるより自ら本郡の專屬を以て目せられたのである、廣袤東西三里、南北二里、周廻實に十三里餘に及び近



熱鹽溫泉　發電所　沼尻スキー場

江の琵琶湖及常陸の霞ヶ浦に次げる本邦第三の大湖である、大同元年二月十五日の夜、磐磐梯山の爆發作用に因りて此湖成り月輪、更科の二壯湖底に沒すと傳へてゐる、四山の溪流皆之に歸し萬代の富源亦此處より發してゐる、一望萬頃、烟波渺茫として對岸の風物宛ら淡墨の畫圖の如し、若夫れ天晴れ風靜なるの日は磐梯以下の群山倒影を湖中に蘸し、水光山色互に相映發して其壯觀言ふべからず、蓋し縣下第一の勝地たるのみならず、又本邦中有數の勝區たるを疑はざるなり、湖中一小島あり翁島と稱す（沿岸翁島村の名亦之に因む）其西北より水湖溢れて日橋川と爲り、下流沿革の地帶を潤す、所謂若松街道を横斷する處即ち戸の口に於て所謂十六橋を架す、又戸の口と山潟及安積郡舟津との間、濱艇の往復するありて旅客の來往、貨物の運搬等主として之に由りたりしが先

鐵年道磐越西線の開通以來漸く其數を減ぜし爲今や全く航行を廢止するに至つた、而も湖畔到る處勝景ならざるはなく就中戸の口、長濱、小平潟（有名なる菅廟あり）山潟及舟津附近等最も景致に富み、春花秋月共に賞するに堪へ、湖面海拔五百十米餘の高處に在りて三伏の候仍清涼を覺ゆるの低溫地なれば、遊覽の時期即ち夏季を以て第一とす、故に近來避暑地として其名高く、隨て湖邊に既記高松宮家の御別邸を置かせらるるに至りし所以である、而して目下國立公園候補地としての調査中に屬し、又附近町村民は保勝會を起して天然名勝の保護及紹介に努力しつつあり。

會津山麓の池のさゝ波やさゝれの石の岩となるまで　保科正之

さゝ波や打出の濱に出し月を會津の海にうつしてそ見る　吉川惟足

【山潟】 鐵道磐越西線に由り會津の天地に入るの門口にして、郡の東南端月輪村の一部大字に屬し、所謂安積疏水の注口を以て知らる、地は西に猪苗代の大湖を控へ、西北に磐梯の雄峯を負ひ眺望富贍、交通至便、加ふるに湖涯、水清淺に氣爽涼にして避暑に適してる、而も地廛寰を距ること遠くして殆ど仙境に入るの感あり、爲に近年內外人の避暑を試むる者漸く多きを加ふるに至つた

【磐梯山】 猪苗代湖の北方、群巒攢峰の間に巍峩として雲際に聳ゆる圓錐狀の秀峰即ち是にして一名『會津富』又『會津山』と稱し、古來都人士の詩歌に入りて夙に世に著れしが明治二十一年七月二十一日の大爆發以來一層其名知れ渡つた、而して其際所謂小磐梯山（即ち櫛ヶ峰）は崩裂して形を亡び獨り主峰の大磐梯山のみ所謂會津高原中に屹立して其秀麗を擅にし海拔實に千八百十九米四面固より其觀を異にするも西南若松附近より之を望めば則ち一個の尖峰にして其輪廓の富士山に類似せるより又『會津富士』とも稱せらる、夏時雲晴れ風靜なるの日猪苗代又は翁島方面より其頂上に登れば則ち會津盆地の山川田野は殆ど一眸の中に入り尙猪苗代湖は宛も山麓に在るが如く見え、其壯觀亦一段の深きを覺ゆ又遠く太平洋の滄溟を望むべく近く檜原湖以下の勝景を瞰るべし。

會津山すそ野の山にともしする火串に火をそかけあかしける　藤原仲實

ほくしかけ鹿に會津の山なればいるにかひあるさつをなりけり　法橋顯昭

しをりして行かましものを會津山いるよりまとふ道としりせは　（古今六帖）

緣しあらは吾もまたこむいはしろの山の麓のきよみつのもと　德一法師

玄女節

一、會津磐梯山は寶の山でよー　笹に黃金がなりさがるよー

一、げん女見たさに朝水汲めはよー　げん女かくしの霧がふるよー

一、げん女踊りはまゝよりすきだよー　ワケテお飯もたべず來たよー

一、去年六月高志王の山でよー　語り殘した事があるよー

一、明日の朝草柳の下でよー　鎌をとぎ〳〵語りませうよー

一、熱海街道の赤松林よー　外の木はない松ばかりよー

の俚謠がある。

【沼尻山】 安達太良山（安達郡）の支峰にして吾妻村に屬し、郡の東端に在るより一に『東嶽』とも呼ばる有名なる活火山にして多量の硫黃を產し、年產額製煉品四五千噸、價格二十餘萬圓、礦石は二十二三萬噸、價格二十餘萬圓に及び明治三十三年七月十七日爆發の際其製煉所を破壞し去られたりしも、更に別處に移して之を繼續し居れり、又山腹に『沼尻溫泉』あり、即ち硫黃泉にして諸症に奇效あるより浴客每に多し、而して此溫泉を更に西方里餘の褐野に引きたるもの即ち『中の澤溫泉』にして亦頗る有名なるに加へ、近年スキー場の開設せらるゝありて世上に喧傳せらるゝに至つた、此他尙附近に橫向中湯及橫向下湯等の溫泉ありて亦浴客の來集多い。

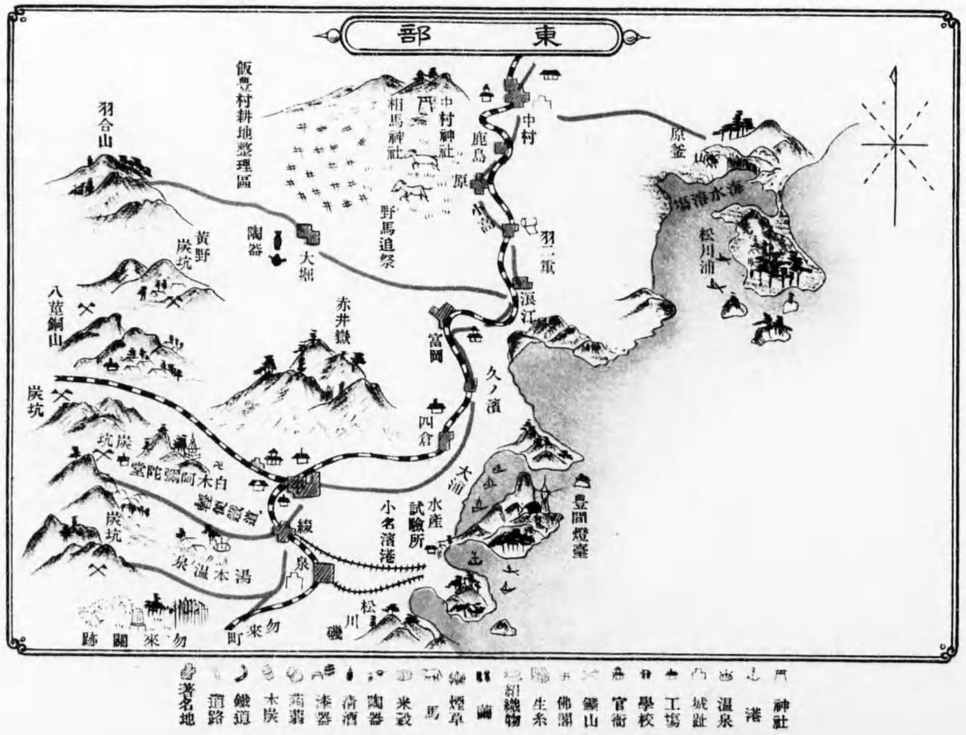
【檜原湖】 喜多方町の東北約六里檜原村に在り、明治二十一年七月二十一日磐梯山の破裂に因りて成りたる新湖にして、又附近の小野川湖及秋元湖も同時に成りたるものである。

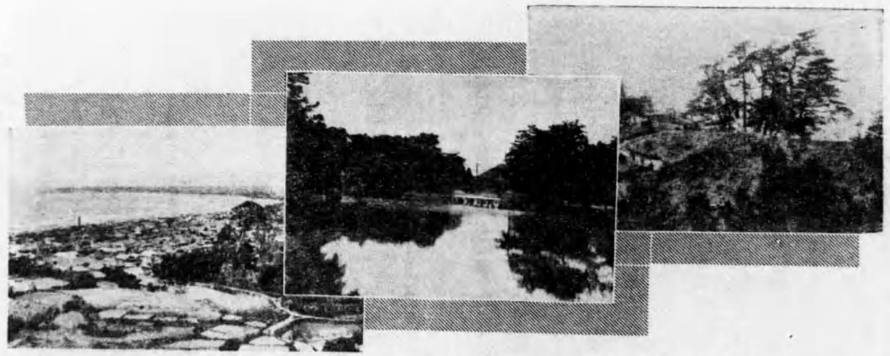
東部

石城郡

本郡は縣の東南端に位して北雙葉郡に隣り、西に石川、東白川の三郡を控へ南、茨城縣多賀郡に境し、東方一帶太平洋に瀕してる、廣袤東西十一里餘、南北十九里餘、面積七十六方里二四三にして七町三十三ヶ村より成り、戸數三萬六千七百、人口十九萬九千七百を有す、地勢概ね平衍にして農科に適し、尙濱海の地は魚鹽の利に富んでゐる、且道路四達、交通至便、物産亦豊富にして實に所謂天府の地である、今其概要を述べんに、即ち鐵道常磐線は始ど國道（所謂陸前濱街道）と並行して南端勿來關址下より北進し來り大小八ヶ所の驛站を經て郡境を越え更に雙葉、相馬の兩郡を通過し宮城縣岩沼に至りて東北本線に合し、又磐越東線は平町地内より發し、郡の西北部及田村、安積の兩郡を經て郡山市に至り同西線及東北本線に聯絡してゐる、加ふるに附近の緩驛を中心として許多の炭田相連り磐城炭礦株式會社、入山採炭株式會社、古河礦業株式會社三中礦山株式會社湯本礦業所、小田炭礦株式會社、福島炭礦株式會社及磐城採炭株式會社等を首め大小數十の炭坑あり、又各處に水力電氣の發生するあり て電燈、電力の需要に應ずる等採炭事業と相俟つて諸工業の勃興實に目覺ましきものがある、而して物産の主なるものは米穀、蒟蒻、馬匹、鬱鬱、清酒、醬油石炭、銅、煉瓦、木材及水産物等にして就中蒟蒻は本郡の特産物である。

【平　町】 本町は寶暦以後に於ける安藤氏の城邑にして舊と磐城平と稱し、明治維新後尙磐城平縣及磐前縣廳の所在地であつたが、同九年八月西部の若松縣と共に中部の福島縣に合併せられ、以來單に郡の首邑として區會所又は郡役所等の中間機關を置かるゝに過ぎざるに至つた、而して地は殆ど郡の中央に位して夏井川に臨み、且國道陸前濱街道と縣道磐城街道との交叉點に當り鐵道亦此





勿來關趾　　平町松ヶ岡公園　　小名濱港

に三叉を盡きて東西北の三方に走れるより交通至便、市街殷賑商工業亦隆盛にして實に水戸仙臺間の名邑である、現住戸數四千六百三十、人口二萬五千八百六十、區裁判所、刑務所支所、縣立中學校、高等女學校、警察署、土木監督所及銀行會社等は皆町内に在り、又町の西端藥王寺臺に松ヶ岡公園々中に幕末の閣老たりし覽藩主安藤信正の銅像を建つ、地高燥開豁にして最も眺望に富み且櫻花の名所を以て遠近に聞えてゐる、町の背後の高丘に平城址あり、僅に殘壘塹壕の形迹を存してある、又藥王寺臺の西方に大舘壕址在り、今好間村大字下好間の地域に屬してゐる。

【縣社子鍬倉神社及飯野八幡神社】共に平町に在り前者は即ち全町の鎮守にして稻倉魂命を祀り、延喜式内に屬し、境域高燥始ど全街を一眸の中に收めてる岩城氏以來歷世城主の崇敬を受

け、尙昔時は岩城四郡（即ち菊多、磐前、磐城楢葉）の鎭守と稱した、後者は康平中源將軍賴義東征の時、山城石清水八幡宮の分靈を見物ヶ岡に勸請し尋て其子義家社殿を造營し及一千餘貫の神領を寄附し、後右大將賴朝亦社殿を修營した、慶長年間鳥居氏築城の時之を此に遷座したるは即ち既記の如くにして爾來『飯野平』の地名に因み『飯野八幡』と稱して亦岩城四郡の總社に椎され、歷代の幕僚及累世藩主の崇敬を受けた、故に社殿宏麗境內蓬嚴にして一見其巨祠たるを想はしむ（例祭に流鏑馬の神事あり）

【白水阿彌陀堂】 內郷村大字白水に在り、本尊佛阿彌陀如來、侍佛觀音、勢至及多門、持國の木像亦名匠雲慶の作と稱せられ、其製作優秀眞に稀世の逸物にして、堂宇と共に明治三十六年特別保護建物及國寶に指定せられた、而して堂宇は即ち方三丈の單層寶形造にして四面に幅六尺の廻緣を附し、內部亦方一丈の內陣を設けて佛壇を安置する等之を平泉の金色堂（方三間、外方五間）に比すれば遙に其規模が雄大である。

【湯本町及三函溫泉】 湯本町は平町の西南二里餘に在りて國道及鐵道の衝に當り石炭輸出の多きこと綴驛に次ぐ、戶數二千百二十、人口一萬三千三百三十を有し、縣下三溫泉の一なる三函溫泉がある、

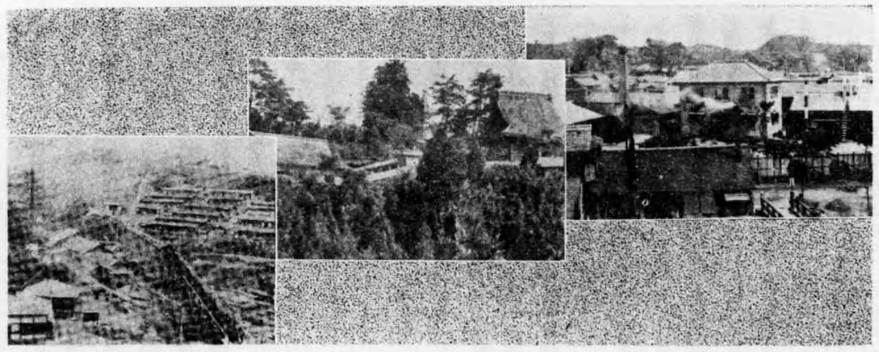
あかすして別れし人の住む里は三函のみゆる山のあなたか　詠者不詳

世とゝもになけかしき身は陸奧の三函のみ湯といはせてしかな　同　上

の古歌を傳へ、尙『三函』の名は西方『湯の嶽』の一名『三箱山』より起りたるものと云つてゐる、數年前までは各處に鬱沸湧出して泉竅の多き殆ど五十餘に及びしが、近年採炭作業の影響より頓に出量減少して、往日の盛觀を見ることを得ざるに至つた、然れども地海岸を距ること遠きにあらざるを以て、每に鮮魚を食膳に上し得るのみならず、交通至便且旅館の設備完具せるより尙四時來り浴する者が多い。

【小名濱町】 平町の南方三里餘に在りて大平洋に臨み所謂三崎其東に突出し西角八崎と相對して灣形を成してゐる、往時は交通運輸の要津として船舶の往來頻繁でありしが鐵道常磐線開通以來昔日の盛觀なきに至つた、是に於て縣は大正七年度以降八ヶ年度の繼續事業として漁船避難港の修築を企て百餘萬圓の巨費を投じて之を竣成した、又更に重要港として目下其工事中である、又鐵道平小線の開通亦應に近きに在るべきを以て今後の發展當に刮目して待つべきものあり、而して今戶數千五百二十、人口七千百を有し、町內に縣立水產試驗場及地方測候所支所等を置かる、又西北、湯本町及西、泉停車場には軌道の敷設するありて交通至便尙町南の淺海は海水浴に適してゐる。

【江名町】 小名濱町の東北隣に在りて軌道に由り交通に便す、戶數九百五十、人口五千四百六十、其大半は漁業を主としてゐる、漁獲高の多きこと縣內第一



水產試驗場　赤井嶽　炭礦

位を占めてゐる、又縣費の補助を得て船舶碇繫場を修築した。

【縣立回春園】 豊間村大字豊間に在りて風光明媚、氣候温和の海濱に位し、大正八年の創立に係りて專ら肺結核患者の療養に任してゐる。

【四倉町】 郡の東北端に在りて國道及鐵道に沿ひ北行直に雙葉郡に入る、戸數千四百六十、人口七千四十を有し、磐城海岸中有數の漁場である、又海水浴場として有名である、町内には警察署、磐城セメント株式會社四倉工業所の設置せられてある、故に工業盛じある、又西一里二十町、大野村大字玉山に玉山鑛泉ありて、浴客絶ゆることがない。

【植田町】 平町より西南約五里、鮫川の左岸に在りて國道及鐵道に沿ひ、舊菊多郡中の首邑にして夙に警察署を置かれ、戸數八百八十、人口五千四百六十を有し、商業亦頗る殷盛である。

【縣社熊野神社】 植田町より西南約十町、錦村大字大倉に在りて伊邪那美尊外四神を祀り、俗に『御寶殿』と呼ばる、社記に大同年間紀州熊野の分靈(寶劍)を勸請して平城天皇の勅願所と爲る、故に毎年例祭には勅使の參向ありしと傳へられてゐる、今尚七歳未滿の小兒に衣冠騎乘せしめて之に擬してゐる、此他祭典古式多く、尚昔時は舊菊多郡の總鎮守として郡内七十三ヶ村に神符を頒布した。

【勿來關址】 鐵道常磐線勿來驛と關本驛(茨城縣)との間なる勿來町大字關田に在りて殆ど常磐の國境に當り、且『菊多關』を本名と云つてゐる、而して其創置は元明天皇の和銅年間に在りて所謂奥羽三關の一なりしと傳ふるも、承和二年の太政官符より推せば則ち概記の『白河關』と同じく正に孝德朝の大化以前に在りしもの丶如く、隨て地方の傳說及好事者流の考證等は多く信ずるに足らない右太政官符に曰く

應准長門國勘過白河菊多兩剗事、右得陸奥解、偽、檢奪記、
置剗以來于今四百餘歳矣。

と而して承和二年は即ち紀元千四百九十五年にして、是より溯る事四百餘歳即ち反正允恭朝の交に當る、以て其創置年代の元明朝よりも尚二百七八十年前に在りし事を知るべきである、然れども『勿來』の名稱がもと專ら蝦夷の南下を拒ぐの關塞たるより起りしことは疑なき所にして、隨て文字亦『莫越』『莫來』又は『名古曾』等其用例一樣でない、又其廢關の年代に至りては今之を考ふるに由なきも、猶三氏實錄貞觀八年正月の記事に據りて當時現在せしことを證見し、越て寛治三年の晩春、源奥州義家が任滿ちて歸洛の途に於ける詠懷即ち

吹く風をなこその關とおもへとも路もせに散る山櫻かな

の國風に據りて、當時は已に廢墟に屬せし斷礎荒徑の間に落花の狼藉たりし情景を想見することが出來る。

【野田の玉川】 湯本町の東南一里弱、玉川村大字野田に在り、所謂日本六玉川の一にして古歌詠ずる所の『陸奥の野田の玉川』是なりと稱せられて近年まで

夕されは汐風こしてみちのくの野田の玉川千鳥鳴くなり

は其形迹を存してゐた、能因法師の所謂

の歌況を想はしめたりしが、明治の末期に及び耕地整理の爲に之を減却し去られた。

【新寢覺の床】 鐵道磐越東線小川郷驛より川前驛に至る間、夏井川の溪流に沿ひたる峽中風光絶だ佳く、高巒危峰水を夾んで峙ち、奇岩怪石到る處に横はり或は懸りて飛瀑と爲り紛々雪花を噴き、或は淀みて深淵と爲り、沈々藍液を湛ふ、一景未だ盡きずして一景更に生じ、殆ど應接に遑がない、此中『籠場瀧』は最も絶景にして上小川村、山部峠の西に在り、即ち夏井の溪流西北より來りて斷崖の左右より相迫壁するに遇ひ、忽ち懸りて瀑布を成す高さ一丈八尺、潤さ三丈六尺、霧飛び雷吼え、過客をして目眩し耳聾するの感がある、而して兩岸の山骨は縛瘠宛も老夫の如く、加ふるに樹木の槎枒たる岩石の犖确たる、奇觀實に名狀べすからず、殊に晩秋隕霜の候に至れば則ち滿山の楓葉錦繡を織り

て、更に其美觀を添へ、人をして恍惚歸るを忘れしむ。

【赤井嶽】　平町を距る西北約一里半、赤井村大字赤井に在りて最高峰を『水石山』と云ふ、海拔七百二十米餘、東腹に藥師堂を安置し、寺院(眞言宗常福寺)ありて之を管してる、規模宏大結構壯麗、境内廣濶、老樹鬱蒼自ら俗塵を絶ち夙に靈驗の顯著を以て聞え賽者常に絶ゆることがない、又奇蹟あり即ち毎夜數十の火光、四倉海上に現れ夏井川を沂りて西し直に山巓に至りて樹梢に懸る、大小明滅變化端なく偉觀を極めてゐる、然れども他處に於ては之を見ることが出來ない、且人の喧噪するあれば則ち中途に減して復た山巓に達せず、故に之を龍王の献燈なりと稱して『御龍燈』と呼んでゐる、而して堂宇は天平六年僧源觀の開基する所と傳へ山名亦一に『閼伽井』とも書してゐる。

【縣社大黒魂神社】　平町の東方約一里半、夏井村大字菅波に在りて事代主命大己貴命及少彦名命を祀り、延喜式神名帳に列してる、元治二年(改元慶應元年)三月正一位を勅授せられ、近年更に鄕社より縣社に昇格せられた、境内幽邃社殿宏壯、位置亦古來不變動と稱せられ、所謂『延喜式内磐城七座』の第一として歴世領主の崇敬を承けた、故に古文書其他の社寶多く、殊に古文書は嘗て東京帝國大學の修史科に供用せられた、又境内に所謂『相生の松』あり、即ち諸婚の靈驗ありと稱して青年男女は賽詣してゐる、

【仁井田浦】　大浦村大字仁井田の海岸一帶の總稱にして、浦頭白沙雪の如く青松林を成して塵寰を隔つ、東は渺茫無涯の大洋を望み、雲濤萬里、水天髣髴として蒼波白帆點々相映じてゐる、西は連山數里の外に環繞して朝靄暮霞變化窮まりなく之を望めば風景亦頗る佳である、又頭を回らして横川の委流を顧みれば則ち深きに魚を漁するあり、淺きに貝を撈するあり、或は綸を垂るゝ者、網を投ずる者、松岸蘋洲の間に隱見し、漁唱棹歌遠く近く相和して聞える、故に里人之を『新舞子』と稱してゐる。

無線電信受信所　　富岡海岸

雙葉郡

本郡は東海岸に在りて、北は相馬郡に、南は石城郡に接し、西は安達、田村の兩郡に境し、廣袤十里二十四町、南北十三里八町、面積五十九方里六三七にして四町十五ヶ村より成り、戸數一萬千、人口六萬五千二百五十を有してる、地勢東方太平洋に瀕する地帶は概ね平坦なるも西方阿武隈山脈に屬する地域は多く高原にして交通甚だ不便である、又主要物産は米穀、馬匹蠶絲、陶磁器、林産物及水産物等である。

【富岡町】　郡の中央に位置して海岸に瀕し、國道及鐵道の衝に當る、戸數七百九十、人口四千三百六十を有し、大正十五年六月までは雙葉郡役所の所在地であつた、而して警察署は此處に在りて郡の南半を管轄し居り、又富岡無線電信受信所、營林署を置かれてある。

【浪江町】　郡の北端に在りて北は相馬郡に境し亦國道の衝に當る。故に夙に警察署を置かる、戸數千五百四十、人口五千五百九十を有し、遙に富岡町を凌駕してる、附近に室原瀧、神鳴山等の名勝あり、又東一里餘に請戸港ありて其附近は海水浴に適してる、警察署、土木監督所を置かれてある。

【縣社芳野神社】　浪江町の東隣請戸村大字請戸に在りて高龍神、倉稻魂神を祀り、後世更に德川家康の靈を配した、又延喜式内の古社なりと傳へられ、最近鄕社より縣社に昇格せられたのである。

【久之濱町】　郡の東南端に在りて亦海に瀕し、戸數八百五十、人口四千三百六十を有し、町内に蠶業取締所支所あり、而して本町附近は鐵道線路の海濱に近接するより、車窓を排せば則ち直に波光濤影を觀賞することを得ては快である南端大字田之網地内に飛驒内匠の造作と傳へらるゝ『波立藥師堂』あり、又傍の海中に巨大なる奇岩ありて一の名勝視せらる、加ふるに此町より石城郡四倉町に至る一里餘の間は國道亦海濱に沿へるより、太平洋の激浪怒濤は直に脚下に逼り、行客をして覺えず快哉を呼ばしむる處、更に防潮林の點々列を成し、偃蹇たる老松の沙濱に盤踞するありて其風景亦多く須磨、舞子に讓らざるを見る、又町の北方小丘を開墾して揚船場を設く、丘の北方危岩相列び波靜にして海水浴に適するより夏季は來り浴する者甚だ多く、尙生姜岩の名勝及館野五郎館址等あり、町民の多くは漁業に從事し、鰹の魚獲最も多く縣内請戸港と相對して漁期は活氣の横溢するを見る。

【鄕社楢葉八幡神社】　久之濱町の北方廣野村に在り。境内に多數の櫻樹ありて地方第一の櫻の名所と稱せらる。而して此神社は即ち康平中源將軍頼義の勸請せし所謂五里八幡の一なりと稱せられ舊楢葉郡の總社である。

松川浦

中村神社

野馬追祭

相馬郡

本郡は縣の東北端、太平洋沿岸に位し、西は阿武隈山脈を以て伊達、安達の二郡及宮城縣伊具郡に境し、南は雙葉郡に隣り北は宮城縣亘理郡に接してる。

廣袤東西八里、南北十里、面積五十六方里五二三にして四町二十三ヶ村より成り、戸數一萬六千二百六十、人口十萬四千を有し、地勢西部山間の五ヶ村を除くの外概ね平衍にして農科に適し、尙濱海地帶には漁撈の利あり加ふるに鐵道常磐線は郡内を縱貫し國道陸前濱街道亦殆ぎ之と並行するより交通至便、物産豐饒である、今其主なるものを擧ぐれば米穀、蠶絲、馬匹、陶磁器、清酒、輸出羽二重、花筵木炭及水産物等である。

【中村町】　郡の北部に在りて國道及鐵道に沿ふ、即ち慶長十六年以來相馬（六萬石）氏歷世の城邑にして戸數千七百六十、人

口九千を有し、大正十五年六月まで相馬郡役所の所在地であつた、此他縣立中學校、高等女學校、蕉陶園及警察署等亦皆此處に在りて居然一郡の首邑を成してゐる、又本町名物の相馬燒は其描く所の野馬は一種の筆勢と雅致とを有し、且質の堅緻なると耐火力の强きとを以て聞えてゐる。

【縣社中村神社】　縣社相馬神社と共に中村町の舊城址に在り、而して中村神社の祭神は即ち天之御中主神にして舊と妙見と稱し、往昔相馬氏の曩祖平將門が下總守谷城に勸請したるを相馬重胤の移封に及び元亨三年太田村に遷座し、尋で慶長年間義胤の中村城に移るに及びて更に此に遷座したるものである、又相馬神社は將門十一世の孫相馬次郎師常の靈を祀りしものにして、所謂相馬氏の祖廟である、境內幽邃、社殿宏壯地方稀に見る所ものである。

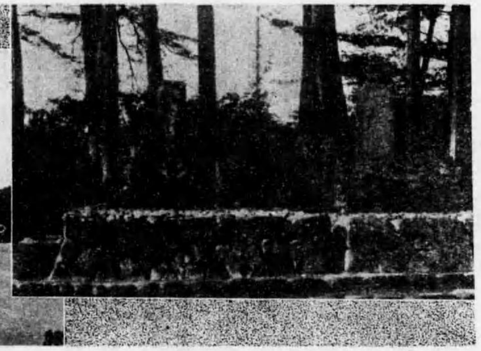
【二宮尊德翁の墓】　中村町に在りて翁の遺物を痙めし所と稱せらる、又傍に有名なる大僧正（日本人名辭書には大僧都とあり）慈隆の墓あり。

【雲雀ケ原】　當地方の習俗として特筆すべきものは即ち『野馬追』と稱する祭禮である、此祭禮は中古以來相馬家が原町なる通稱雲雀ケ原（一名野馬追原）を中心として行はれし一種の演武法にして、尙其以前にも亦牧畜民間に於ける一の年中行事であつた、即ち

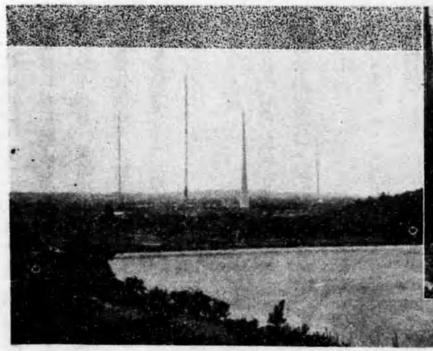
陸奥の荒野の牧の駒たにも取れはとられて馴れ行くものを

といへる古歌に徵して知ることが出來る、明治維新後、磐前縣に於て悉く野馬を收め之を沾却したりしより、爾後久しく中絕し居たりしが、二十七八年役の戰勝を祝する爲之を擧行したる以來、每年七月十二日（最初は二月）を期して之を行ふことゝし、且野馬に代ふるに旗幟を以てして騎士之を爭ひ、寨る部伍進退觀るべきものないが、其甲を揮き旗を負ひて縱橫馳驅するの狀は仍往時に異らず、隨て其觀衆の多き縣下他に其比を見ざる所である。

【松川浦及原釜灣】　中村町南に鮭の生產を以て有名なる宇多川あり、其河口豁開して松川浦と呼び、中村町より一舟に棹せば、則ち下ること里餘にして此處に到るべし、浦中に所謂十二景ありて、貞享年間中村侯相馬昌胤の選ぶ所に係り、其景勝彼の松島に讓らずと稱せらる、先年中村町外三ヶ村の漁港組合を設け、浦口を開鑿して漁船の出入に便ならしめたるも尙漁港としては備なる、又近年北方の原釜の灣に海水浴場の開設あり、海水清く波浪穩に凉風肌に迫りて一浴三伏の炎熱を忘れしむるものあるより浴場として東北海岸中第一を以て稱せらる、南方磯部村なる磯部濱亦海水浴に適し、每夏浴客の群集を見る。



二宮尊德の墓



無線電信送信所

【鹿島町】　中村町の南方三里に在りて、戶數六百、人口三千二百八十を有する一驛邑にして米穀の集散地である、町內に延喜式鹿島御子神社あり、又東北三十町許の八澤、磯部兩村間に所謂八澤浦八景ありて亦雅人に尋訪せらる。

【原町】　所謂陸前濱街道中著名の驛邑にして其梯衢の形容よ

り一に『弓形の宿』と稱せられ、鐵道常磐線中の主要驛である、此地交通至便町勢日に月に發展し、現戸數二千二百、人口一萬千三百七十七を算して郡内の第一位を占む、又町内縣立農蠶學校、蠶業取締所支所、土木監督所及警察署等の樞要機關ありて繁華を助長しつゝある。

【原町無線電信送信所】布哇及桑港との直接通信を開かんが爲に設置せられしものにして、大正十一年の竣功に係る、即ち原町郊外の平原中に大鐵塔の聳立するもの是にして、高さ六百六十呎に及び裝置完備東洋隨一と稱せられ、實に地方の一偉觀を呈してゐる。

【縣社太田神社】原町の南方里餘、太田村大字中太田に在り、所謂相馬三妙見の一にして、既記中村神社と祭神を同じくし、尙元亨三年相馬重胤が初めて下總より遷座する所なるを以て、三社中の第一に擬せられてゐる。

【新田川】新田川は源を阿武隈山脈中の潮上山（石橋村地内）より發し、原町の北方を東流して澁佐濱に注ぐ、流域十一里餘、水清くして多く鮎、鮭を產し就中鮭は此川の特產にして毎年許多の漁獲あり、殊に十月より十一月に至る產卵期中は一網能く七八百尾を捕獲して、頗る壯觀を呈するを見る。

【小高町】郡の南方に在りて國道及鐵道に沿ひ、戸數八百六十、人口六千四百四十を有す、亦相馬氏の舊城邑にして今尙其城壘あり、而して本町は伊達郡川俣町及福島市に次ぐ輸出羽二重の生產地にして、隨て縣立輸出絹織物檢査所支所を置かれてある。

【縣社小高神社】亦所謂相馬三妙見の一にして小高町の北郊、小高川の北崖なる紅梅山浮舟城址に在り、建武年間相馬重胤（太田城主）其弟光胤に命じて此に築城せしめ時、之を勸請したりしものと傳へ、所謂野馬追祭に際し野馬駐を行ふ所にして社殿宏壯、境內廣濶、頗る眺望に富んでゐる。

相馬郷土の民謠は今日尙流行してゐる。

◇相馬流れ山

相馬流れ山習ひたか御座れ
青い野馬原一夜のうちに
向ひ小山のがんけのつゝぢ
國見がくれにまだ帆が見いぬ
相馬〳〵と木萱もなびく
姉さ何處へ行くこつこけ小ざるを手にさげて　川原柳の下に鮎とりに

五月中の申御野馬追
花か咲いたよ騎馬の旗
及びなければ見てくらす
とゝを思ふてほをぬらす
なびく木萱に花が咲く

◇二遍返し

二遍返しはままにもなるが
二へん返して三べん目には
相馬戀しや妙見樣よ
かへりさんせや港が白らむ
相馬中村石屋根造り
見にくいけれ共相馬の柚子は
原の町とはたが名をつけた
鮎はせにすむとりや木にとまる

三度かへしはままならぬ
義理と人情の板ばさみ
はなれまいとのつなぎ駒
隣近所のとりもなく
かはらないので人がすく
身よりかわいと人か云ふ
原がなければたゞの町
人はなさけの下に住む

◇相馬麥搗節

相馬よいとこ女の夜なべ
相馬中村の新開樓がやけた
麥もつけたし淺頃も來たし
男力で麥の皮むける

男梅樂れてまちる
やけひろがるので花が咲く
うちの親達れろ〳〵と
麥をつく樣な婿ほしい

産業概要

農業

本縣は農業に適する平原到る處に展開してゐるが爲耕地の面積は實に十九萬町歩以上に達してゐる、加之尙年々增加しつゝある。而して縣立農事試驗場を郡山市に、同分場を石城郡神谷村及河沼郡坂下町に設置し、又縣立農學校及各種講習會等を設け、鋭意斯業の改良發達を促してゐる。今試に之を食用農産物に徵するに、米の平年收穫高は優に百五十八萬石以上に達し、縣下到る處に之を産し就中會津平野、阿武隈沿岸及太平洋沿岸地帶が主産地である。米質は概して佳良なるも會津米は殊に市場に名あるのみならず。釀造用として好評を博してゐる、麥は氣候の關係上關東地方に比して遜色あるを免れざるも、猶三十五萬七千餘石に上り、大豆亦九萬七千三百餘石、馬鈴薯七百三十六萬五千餘貫を産し品質の優良を以て稱せられてゐる。此の他特産物として梨、柿、櫻桃等の園藝農作物は夙に世に知らるゝ所にして、尙特用農産物には葉煙草を首め漆液藥用人參及麻苧類等を産出して俱に內外に聲價を擧げてゐる。

蠶業

縣下到る處之に從事してゐる。殊に最も盛んなるは伊達、安達、信夫の三郡にして縣下の六割を占め同地方に於ては、寧ろ米作より之を重んじてゐるが如き狀況である。而して本縣の地味は頗る桑樹の發育に適し、桑園の總面積は三萬九千六百餘町歩に達し、畑地の總面積に對して四割三分以上の歩合を占め、又一ヶ年の收繭高は約三百五十餘萬貫に達し、蠶種の産額亦約二百萬枚に及び其の中他府縣に移出せらるゝもの頗る多く、其の製造業者は六百五十餘人にして伊達郡其の大部を占めてゐる。

縣立蠶業試驗場は伊達郡梁川町に、同支場は田村郡小野新町に在り。又蠶業取締所は縣廳內に其の支所は福島、桑折、梁川、郡山、保原、掛田、二本松、三春、若松、原町、石川、白河、只見に置き、常葉、久之濱等に出張所を設けられてある。

農林省蠶業試驗場の支場亦福島に在りて、縣の試驗場と提携して斯業上に寄與貢献してゐる。故に斯業は將來益々多望である。

牧畜業

産馬業は古來廣く行はれ、世人の所謂三春駒は卽ち田村郡常葉地方の産駒を指せるものにして、南部馬と並び其の名聞えてゐる。是れ到る處に仔馬の放牧に適せる原野あると、舊藩政時代は特に意を馬政に用ひ、百方産馬を奬勵したる結果である。近年に至り政府に於ては西白河郡西郷村に福島縣種馬所を置き縣亦安達郡高川村に福島縣種畜場を設置して、良種馬の供給を圖り、更に産馬畜産組合の設立を奬勵して斯業の發達を圖りしかば、縣下到る處馬匹を飼育せざるはなく、其數無慮八萬二千頭に達し、北海道に次ぎて各府縣の首位に在り之に反して他の牧畜及養鶏等は尙微々として振はざりしも、近年盛んに之を奬勵せし結果、遂年好成績を示し、現今緬羊二千頭、豚一萬三千頭、鶏百五萬三千羽以上を算ふるに至つた。

林業

本縣に於ける山林は栃木縣に接する一部と山形縣との境にある、飯豐山附近との寒帶林に屬するものを除くの外、他は悉く溫帶林に屬し會津地方の如きは天然の美林を以て聞えてゐる。然れども其の林野の多くは國有林（四十七萬町歩）にして民有林（六十五萬四千餘町歩）殊に部落有林は漸次荒廢に傾きつゝあるより、殖林は勿論天然林の保護、伐採後の植付等を奬勵し、又各地に林業講習會を開催して改良製炭法を授くる等、斯業の發達に力を致したる結果、其の成績は遂年良好に向ひつゝある。

而して林産物としては木炭を第一とし其の産額二千六十二萬貫餘、價格四百四十八萬圓餘に達し、之に次ぐは用材にして二十九萬五百石、價格參百七拾七萬

餘圓を算してゐる。故に將來斯業の發展を見るは敢て言の俟たざる所である。

水産業

本縣は東方太平洋に瀕して延長約四十里の海岸を有し、寒暖兩潮の交流するより鰹、秋刀魚、鰯、鰤及鰮等の魚族に富み、極めて有望なる漁場なれども、憾むらくは碇繫避難に適する港灣が少ない。然れども縣は小名濱港を修築し、又松川浦及四倉港を縣費支辨に編入した。加之江名漁業組合に於ては縣費補助金を以つて船舶碇繫場を築造した。而して縣は明治三十五年石城郡小名濱町に水産試驗場を設置して、漁撈及製造の指導奬勵に努めたる結果、石城節の如きは大に面目を改め東京市場に於て聲價を博するに至つた。又淡水漁業としては猪苗代湖其の他の河川に於て鯉、鱒の養殖を計りつゝあり。

鑛業

本縣は頗る豐饒なる礦産地にして金、銀、銅、鉛、亞鉛、硫黄等其の種類頗る多く、又所謂磐城炭田地帶には頗る豐富なる石炭を包藏するを以て、採鑛業は逐年勃興しつゝある。而して此等鑛山の代表を以て目せらるゝものは即ち磐城炭山、半田銀山、八茎銅山、吾妻硫黄山等である。

製絲業

本縣に於ける製絲業は近年著しく發達し、即ち器械製絲に化したる爲め、從來の座繰製絲は殆んど其の跡を絶つに至つた。而して本縣の生絲は遠く安政年間佛國及英國に輸出を試みて大に好評を博したのであつたが、其の後粗製濫造の弊に陷り、頓に信用を失墜した、こゝに於て、所謂折返法の製法に依りて其信用を一時回復するを見るに至りたるが一盛一衰、明治十七年衰頽の極に陷つた。故に或は蠶絲業取締規則を發布して不正品を取締り、或は諮問會を開きて適法を講ずる等、指導誘掖に努めし結果、明治二十二年特殊組織の生絲共同荷造所を福島市に設立し、生絲の品質に依り等級を分ち造替を爲し、且商標を附して輸出なしたる爲聲價頓に昂つた。現時器械及座繰を合せ四十萬貫以上、玉絲二萬八千貫以上に上り尙漸次發達を見つゝあり。

川俣羽二重

輸出品として古來市場に有名である。此の羽二重は輕目絹にして、原料の精良なると織耳の整齊たるとにより他に多く其の比を見ざる所のものである。加ふるに精體法亦巧妙の爲色澤純白、品位高尙にして能く需要地の好尙に適し、且其の價格の低廉に比して品質優良である。輸出先は主として米國佛國印度及濠洲等にして、其の需要年と共に多きを加ふるに至つた。而して斯業に對する縣の指導機關としては福島縣に工學試驗場、川俣町に同分場を設立して、川俣羽二重及び内外向織物の研究指導を爲し又川俣工業學校を設けて當業子弟の教養に努めつゝあり。現時生産額は總量二十八萬三千餘斤、價額三百二十二萬圓である。

會津陶滋器及相馬燒

本縣は到る處陶土散在して原料甚だ豐富の爲め、古來製陶土地として聞えてゐる。其の中代表的なるものは會津燒及相馬燒である。其他二本松萬古燒、長沼燒及福良燒等ありて、年額九拾壹萬圓に達してゐる。

會津燒は舊き紀源を有し主として、大沼郡本郷町及北會津郡川南村より製出せられ、電氣用磁器と共に現今年産額六拾萬圓を算するに至つた。

相馬燒は相馬郡中村町、八幡村及雙葉郡大堀村より産し、駒燒又は罅燒とも稱し、其の形狀色合共に雅致に富み、且品質堅牢にして火力に耐ふる特性を有し其年産額は貳萬四千圓餘を算してゐる。

會津漆器

會津漆器は若松市を主産地として耶麻郡喜多方町之に次ぎ、品質の堅牢なると粮漆の良好なるとを以て聞えてゐる。而して其の生産狀態は悉く個人經營なるも分業法に依り丸物工、板物工、蒔繪工、總輪工、下地工及中通工の六種に分て行つてゐる。

販路は東京及關東方面より東北、北海道に及び、尙京坂商人によりて遠く支那方面に輸出せられてゐる。

釀造業

本縣釀造業の主なる製品は清酒及醬油である。清酒は本縣工産品中重要なる物産にして、各郡市より産出し、現今二百九十五ヶ所の釀造所ありて、其の年産額十四萬七千餘石、價格千百七拾四萬餘圓に達し、縣下に酒造組合及其の聯合會ありて、相互聯絡を保ち、優良なる製品の釀造に努むゐ等、常に改善を期圖しつゝあるを以て需要益々增加し、北海道、東京、茨城等の各地に移出してゐる。醬油亦各郡市より産出し、現今三百九十五ヶ所の釀造所ありて、年額七萬二千餘石、價格貳百七拾五萬四千餘圓の生産を見てゐる。

化學工業

縣下の化學工業は水力電氣の發達と共に早くも已に發達し、事業は益々隆盛を見るに至つた。現今に於ける斯業の主なるものは東洋曹達株式會社郡山工場の曹達、磐城セメント株式會社四倉工業所のセメント、東部電力株式會社カーバイト工場（郡山）のカーバイト、東京鑛材株式會社廣田製鋼所の鋼鐵、高田鑛業株式會社大寺製煉所の合金鐵製造等あり。

又耐火煉瓦は石城郡より産出せられ最近年産額六拾萬參千餘圓を産し、品質又優良にして各種の工場、建築業者、東北地方の鑛山及製煉所等に需要頗る多い。普通煉瓦亦縣内各地に産し、年額六拾貳萬餘圓に達してゐる。此他製紙の原料頗る豐富の爲農家の副業として生産してゐる。尙白河町、郡山市に於て機械製紙擡頭して來た。各紙類の年産額亦四拾壹萬參千餘圓に達してゐる。

會社事業

由來本縣は土地廣く交通便にして各種の原料を有し、且豐富に原動力を發生すべき燃料及電力を起すに足るべき、奔流飛爆等の各地方に存在するより近年各種の企業の勃興を見つゝあり。今縣下に於ける事業會社を見るに其の數六百三十三にして、此の拂込資本金六千九百五拾萬五千餘圓、積立金九百八拾九萬八千餘圓を關してゐる。然し大會社は概ね本社を京濱地方に置きて、支社又は工場を本縣下に設くゐもの多く、之を分別すれば即ち農業會社二十八、商業會社二百二十三、工業會社百八十七、運輸業會社六十四、會融會社百二十一、其の他の會社は十である。

昭和六年十月一日印刷
昭和六年十月五日發行

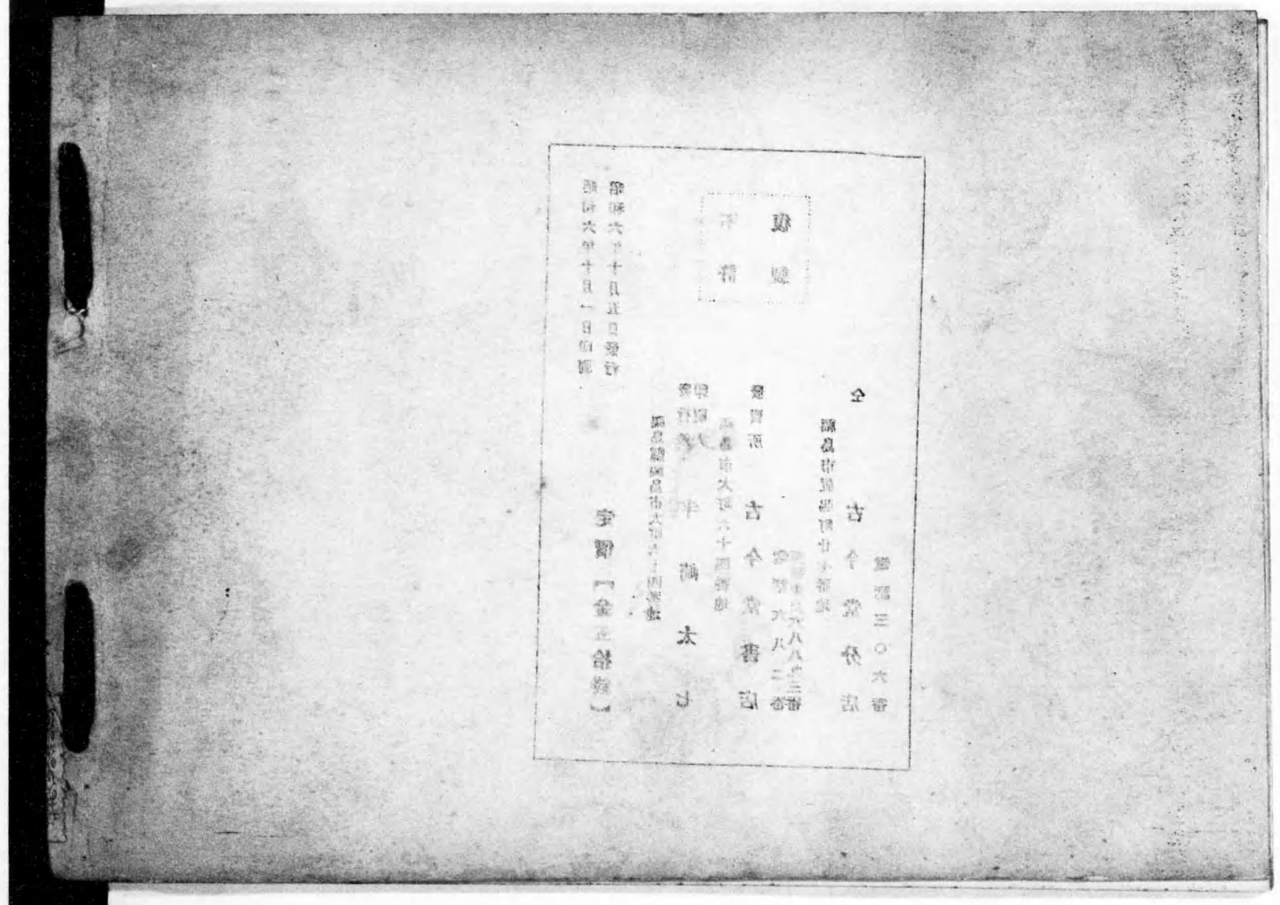
定價【金五拾錢】

福島縣福島市大町六十四番地
發行兼印刷人　半崎太七

福島市大町六十四番地
發賣所　古今堂書店
電話六八二番
振替東京六八八九三番

全　福島市置賜町廿七番地
古今堂分店
電話三〇六番

不許復製



終